

GATE 男性IS操縦者 彼の地にて斯く戦えり

ブルーデステニー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

織斑一夏は大会に出場する姉を応援するためドイツにいた。しかし一夏は大会開催中に誘拐されてしまう。一度は脱出するが、すぐに見つかってしまい近くの倉庫に隠れようとする。その倉庫の中には大量の銃と装備品があり、その銃で応戦するが爆発で重傷を負い、吹き飛ばされた先にあった謎の黒い渦に入ってしまう。

黒い渦を抜けた先は後に特地と呼ばれる世界だった…

## 目次

応戦、そして異世界へ	1
出会い	6
炎龍来襲	9
到着！自衛隊基地	15
イタリカに行く前に	18
イタリカ防衛戦	23
現I S設定及び状態	29
帰還・・・そして・・・	32
想いと天災襲来	39
お買い物は計画的に	45
温泉はマナーを守って入りましょう	51
刺客から逃げろ	56
復活のPラファール	62
やっぱりお風呂は疲れをとる最高の手段だと思う	68
一夏のわりと忙しい特地生活／どうやらロウリイ様は激おこのよ うです	72
死神連合& a m p ; 炎龍編	
特地要人護衛任務	77
対ドラゴン戦闘用装備と屑共と再会と	81
地下とチームと装備調達①	91
地下とチームと装備調達②	105
作戦会議とならし作業	115
死神連合討伐作戦開始!!	119



## 応戦、そして異世界へ

第一話：応戦、そして異世界へ

side：ドイツ

???:「はあ... はあ...」

怪しい男：「くそ!!何処に行きやがった!!?」

怪しい男：「まだ近くいるはずだ!!探し出せ!!」

その日、織斑一夏は謎の集団に追われていた。

???:「一夏：「くそっ!!何でこんなことになったんだ!!?」

一夏は第二回モンド・クロツソに出場する姉を応援するためにドイツに来ていた。

一夏は、観戦中に役員と思われる人物に呼び出され、指定された場所に行ったが、怪しい男達に襲われ、気絶してしまう。

男達の目的は姉に一夏を誘拐したことを伝え、大会を棄権させることだった。

一夏は隠し持っていた小型ナイフで拘束を解いて脱出するが逃げられたことに男達が気づき一夏を探し始める

一夏は謎の集団に見つからないようにしながら隠れる場所を探す。

一夏：「うん?あそこは... 隠れるには良さそうだな。」

一夏は近くの倉庫に入り、出入口の鍵を閉める。

一夏：「ふう... 少しは休めそうだな... っておいおい... 何でこ

んな所に銃があるんだよ...」

一夏が入った倉庫の中に様々な種類の銃（大量）と弾薬、改造パーツが入ったコンテナがあった。

その他にも、非常食や治療薬、高性能無線機（バッテリー切れ）といったものであった。

一夏：「けど何も無いより武器があったらまだ抵抗は出来るな。勝手に使うのはあれだが使わせて貰おう。」

一夏はコンテナから銃と弾薬を取り出す。銃の知識はあるため、自分が使えるようなものを探す。

一夏：「取り敢えずハンドガンとサブマシンガンで使えそうなやつは…これぐらいか…ん？なんだこりゃ？」

一夏は六角形の装置とマニュアルを見つける。  
その隣には見たことがない銃があった。

一夏：「この装置はI Sの技術を応用した収納装置か…これでハンドガンとか以外の銃も持ち運べるな…」

「スナイパーに対戦車ライフル、グレネードランチャー、って対戦車ミサイルまであるのか…」

「この銃はなんだ？やけにゴツイ銃だが…何か文字が書かれてるな…AIS…？これって最近出来た対I S用の銃か!!何でこんなもんがあるんだよ!!しかもサイレンサー着脱装置とレーザーサイトまでついてやがる!!」

怪しい男：「っ!?オイ!!ここから声が聞こえたぞ!!」

怪しい男：「不味いぞ!!そこはもう一つの取引の物がある場所のはずだ!!」

一夏：「しまっ!?くそっ!!急いで装備を集めないと!!」

一夏は収納装置を使って武器とその他の必要な物を出るだけ収納し、AISとサブマシンガンのVZ61に弾を装填する。

それと同時に扉が破壊される。

怪しい男A：「探せ!!場合によっちゃ殺しても構わねえ!!」

怪しい男B：「くそっ!!ブツが幾つか無くなってやがる!!あのガキか!?!」

怪しい男C：「散開だ!!相手はガキ一人だけだ!!」

一夏：「数は三人か…アイツらの武器はナイフとスタンガンか…いや一人だけ銃を持ってるやつがいる。」

一夏はAISにサイレンサーを装着する。

気づかれないようにしながら扉があった場所まで向かうが……

怪しい男A：「!?いたぞ!!」

一夏：「しまっ!?くそっ!!【パスッ!!】」

怪しい男A：「グアッ!?!」(死亡)

一夏はA I Sで男を射殺する。

一夏：「あと二人!!」【ズガガガガツ!!】「うわっ!?!」

怪しい男C：「やりやがったなこのガキ!!」

男はM P 5 Kで一夏がいる方向を攻撃する。

一夏：「チツ!!こっちは実弾を使った戦闘なんかしたことがないつてのに容赦ねえなオイ!!」

実は一夏は本物の銃を使った戦闘は初めてではなく戦闘用の実弾ではなく、非殺傷のゴムスタン弾やペイント弾を使った戦闘ならある場所は何回もしたことがある。

その場所はいずれ話すことにだろう。

コンテナを楯にして男の銃の弾切れを待つ。

怪しい男C：【ズガガガガツ!!カチツ!カチツ!】「ツチ!!弾切れか!?!」

一夏：「今だ!!喰らいやがれ!!」【ズガガガガツ!!】

一夏はV Z 6 1に入っている弾を全部使って怪しい男に攻撃する。

怪しい男C：「グウアアアア!?!」(死亡)

弾は容赦なく男の命を奪った。

残る敵はあと一人……のはずだった。

I S 乗り：「チツ!!使えない男ね!!ガキ一人捕まえるどころか殺すことが出来ないのか!?!もういい!!私がやる!!」

I S 乗り一人と武装集団が増援として戦闘に参加。

一夏：「I S!?!おまけに武装集団まで!!アイツら本気で殺す気だ!!でもやるしか(ズガアアアアン!!)うわああああ!?!?!」

一夏の近くのコンテナにI Sのミサイルが直撃する。

一夏：「こんなところで爆発するタイプの武器使うなよ!!(ズガアアアアン!!)うおっ!?!このおおお!!倍返しだああああ!!」

一夏はやけくそでサブマシンガン2丁で、I S 乗りに向けて攻撃を開始!!

I S 乗り：「そんな物!!I Sには効かな【danger!!dangerr!!】えっ!?!ちよつと何でそんな物がI Sに……まさか!?!対I S弾!?!」

一夏は気づいてないが一夏がサブマシンガンに装填した弾は対IS用に作られた特殊な弾でISにダメージを与えることが出来る。

一夏：「効いてる…？なら!!」

IS 乗り：「嘘!? IS が!? くっ!! 舐めるな!!」

IS 乗りがライフルで攻撃すると同時にシールドエネルギーが無くなり待機形態に戻ったISが一夏のいる方向に飛んで行ってしまふ。

ISは収納装置に入っていたが一夏はそのことに気づかなかった。

ライフルの弾は一夏に当たらなかったが近くの燃料タンクに直撃し、爆発する。

爆発は凄まじく、近くにいた一夏はもろに爆発を受けて吹き飛んでしまふ。

一夏：「うわああああ?!?!」

吹き飛んだ先には謎の黒い渦があった。

一夏は自分が渦の中に入っていくことに気づいたが何も出来ずに気を失ってしまった。

その後誘拐に気づいた警察と千冬が倉庫に駆けつけたがそこには男達の死体と一夏が着ていたとおもわれる服の切れはしだけが残っていた。

side change

side:???

少女：ふう、今日はここまで。師匠に今日やったことをほうこ（ズドオオオオンツ!!）うわっ?!?何が…」

少女が修行場所の泉をから離れようとしたとき、いきなり泉が爆発した。

少女は泉に戻り、何が起きたか確かめにいく。そこで見たものは大怪我をした少年…一夏だった。

少女：「何で男の子が…？って凄い怪我、すぐに治療しないと。」

少女…レレイ・ラ・レレーナは一夏を治療するために自宅に一夏を運び始めた…



この出会いが後に二人の運命が変わる出来事に繋がっていく...

## 出会い

出会い

side：コダ村の外れ

一夏：「：知らない天井だ：：ここは何処だ：？」

一夏が目を覚まして見たものは知らない部屋の天井だった。

一夏：「俺は：：そうだ、あのとき（ズキツ!!）イデデデデデッ!!ってなんじやこりや!?!」

一夏は急にはしった痛みで完全に目を覚まし、自分の体が包帯まみれになっていることに気づく。

ちようどその時部屋の扉が開いた。

レイ：「あ、起きた? 【○○○○?】」

一夏：「?、?すまんもう一回言ってくれ。【?、?○○○○】」

二人：「：：：：?」

(※言葉が通じていない)

カトー：「レイや、拾ってきた少年はもう大丈夫なのか?今日の分の薬を持ってきたんじゃが? 【○○○、○○○?○○○○?】」

レイ：「お師匠、目は覚ましましたけど、お互いの言葉が通じない。

【○○○、○○○】

カトー：「なに?それはまいったの。とりあえずこの薬を飲ませよう。【○○?○○○○?】」

カトーは薬を一夏に渡し、薬を飲むしぐさをして薬を飲むように伝える。

一夏はカトーのしぐさを見て薬を飲むが：：

一夏：「!!な、なんだこれ：：：?」

バタリッ

一夏は気絶してしまった。

レイ：「っってお師匠!?!何を飲ませた!?!」

カトー：「いや、いつもの薬を飲ませたはず：：って、あ!?!これ開発中の薬じゃ!?!間違えてしもうた!?!」

数分後：：：：

一夏：「ううう、あれ？確か俺起きてたよな？何でここ数分の記憶が無いんだ？」

レレイ：「あ、起きた。大丈夫？」

一夏：「うん？ああさっきの人か…大丈夫…ってあれ？」

二人：「あ!!言葉が通じてる!!」

一夏：「何で急に言葉が通じる様になったんだ？」

レレイ：「恐らく、お師匠が間違えて飲ませた試作の薬の効果だと思う。」

一夏：「おい!!なんて物飲ませてくれたんだよあの人!!言葉通じるようになったからまだ良いけど!!」

レレイ：「不幸中の幸いだった。まだ名前を覚えてなかった。私は

レレイ・ラ・レレーナ、よろしく。あなたは？」

一夏：「一夏、織斑一夏だ。所で此処は何処だ？」

レレイ：「ここはコダ村の外れにあるお師匠の家。」

一夏は聞いたことがない村の名前に困惑する。

一夏：「コダ村？すまん、聞いたことがない。ドイツの村か？」

レレイ：「ドイツ？聞いたことがない。」

一夏：「マジか…一応聞いとくけど日本って国は分かるか？」

レレイ：「それも聞いたことがない。」

一夏：「うそーん…ってことはあれか？俺はあのとときの黒い渦に入ってしまったせいで俺の知ってる国がない世界に来たって事か!？」

レレイ：「恐らく。ってことはあなたはこちらで元の世界に帰る方法を探さないといけない。」

一夏：「おまけに方法が見つかるまで住む場所や働く場所も探さないといけない。」

カトー：「なら、ここに住めば良い。」

一夏：「あ、さっきの…でもいいんですか？」

カトー：「構わんよ、幸いにもわし達は流浪の民じゃ、そのコネを使えば元の世界に戻る方法がわかるかもしれん。働く場所は…まあ出来るだけの範囲でわしらの補助を頼もう。」

一夏：「補助？」

カトー：「そうじゃ。簡単には言えば家事や魔導師が研究のために必要な物を一緒に探したりじゃな。どうじゃ？」

一夏はカトーの出した案をどうするか考えたが、すぐに答えを出す。

一夏：「わかりました。ではお世話になります。」

こうして一夏の異世界の生活が始まった。

オマケ

武器説明

A I S

銃種：ハンドガン

説明

対 I S 用に作られた試作銃。

使用する弾は対 I S 弾。

試作銃だが銃の性能は良く、発射時の反動も小さいため使いやすい。連射性能も高く弾幕を張りやすい。

対 I S 弾以外にも通常の弾丸も使用可能。

サプレッサー着脱装置、レーザーサイト付き



村人：「炎龍だ!!近くのエルフの村に炎龍が現れた!!」

カトー：「何!?炎龍じゃと!?!」

一夏：「炎龍って前に話してたあの?」

カトー：「そうじゃ。わしは見たことは無いが、見つかったら最後、喰われるか、炎の息で焼き殺されるのじゃ。」

一夏：「リオ●ウスかよ…… 確かにヤバいな。」

レレイ：「リオ●ウス?」

一夏：「あ、いや、何でもない。」

カトー：「とにかく早く逃げなければ!!イチカ!!レレイ!!すぐに本と必要な物を馬車に乗せるんじゃ!!」

一夏：「わかりました!!レレイ、お前は先に本の方を頼む。俺は食料と貴重品を持ってくる!!」

レレイ：「わかった。」

二時間後……

一夏：「これで…… 最後つと……」

馬車に荷物を乗せ終わり、出発する準備が終わった。

カトー：「よし、では出発じゃ!!」

ところが荷物が多すぎたのか馬車は動かなかった。

三人：「……」

変な沈黙が1分ほど続いた。

カトー：「…… 動かんね……」

一夏：「まあ、こんだけ本積み込んだらこうなるわな……」

レレイ：「イチカの収納装置はもう一杯なの?」

一夏：「正直にいうと自分の世界の物だけで容量ギリギリだからな……」

(※ちなみに収納装置の中身を一夏は見せたことがないため、レレイ達は中に何が入っているか分からない。)

レレイ：「仕方がない…… 本当はあんまり魔法使ったらダメだけど……」

レレイは魔法で馬車を浮かせて、馬を出発させた。

数時間後、馬車は長い行列の最後尾に着いた。

一夏：「?なんだ?」

カトー：「何やら騒がしいのお?」

村人：「カトー先生!!」

カトー：「?どうしたんじや?」

村人から事情を聞くと、前の列で馬車が横転してしまい、道を塞いでいるらしい。

レレイ：「ちよつと様子を見てくる。」

一夏：「おう、気をつけてな。」

レレイは馬車を一夏に任せて様子を見に行つた。

side：レレイ

レレイは村人から聞いた場所へ向かう。

そこには倒れた馬車と怪我をした倒れている馬、小さな女の子が倒れていた。

レレイは女の子の処へ行こうとするが、その前に見たことがない服装をした女性が女の子の状態を確かめる。

???：「この子は脳震盪を起こしています。肋骨も骨折している可能性も…」

レレイ：「?この子の体を調べてる…。?それに知らない言葉…。」  
(※レレイはまだ日本語を知りません。一夏と話せる理由は前回の話であった、カトーの試薬の効果です。そのため他の日本人の言葉を聞くことも話すことも出来ません。)

???：「君、危ないから下がって!!」

女性と同じ服装を来た男性が話かけるが、馬の鳴き声のせいで聞こえていなかった。

男性がもう一回声をかけようとしたその時、馬がいきなり暴れだした。

近くにいたレレイは逃げ遅れてしまう。

馬に蹴られそうになった次の瞬間、何かが破裂する音がしたのと同じ時に、馬が倒れていた。

レレイが破裂音がした方を見るとそこには男が謎の武器を馬の方

に向けていた。

レイ：「あの人？私を助けた？」

side Change

side：山岳地帯

レイは馬車に戻るとその時のことを二人に話した。

カトー：「そんなことがあったのか・・・」

一夏：「もしかして・・・次の休憩の時に会って見るか・・・」

レイ：「とにかくその人達は私を助けてくれた。」

一夏：「ちようどいい。後で一緒に行こう。」

レイ：「わかった・・・うん？何？あれ・・・？」

一夏：「!!みんな!!急いでにげろおおおお!!!!」

一夏とレイの視線の先には赤い龍がいた。

カトー：「あれが本物の炎龍か!？」

一夏：「レイ!!出来るだけ距離を離してくれ!!すぐに使えるやつ

は・・・くそっ!!3つだけか!!」

一夏は収納装置からAISとM4、バレットM82を取り出す。そ

れと同時に炎龍の近くにいた車から射撃が開始された。

一夏：「車・・・!!それにあの服は確か自衛隊の・・・ってことはやつ

ぱり俺の世界の人達(ボオオオオオオオオ!!)ってうわっ!!レイ

早く!!」

レイ：「!さっきの人達が持ってたやつに似てる・・・?もしかし

てあの人達は・・・」

一夏：「ああ、俺がいた世界の人達の筈だ!!」

レイがM4を見て驚くが炎龍がこちらに近づいて来たため慌て

て進路を変更する。

一夏はM4で炎龍に攻撃するが・・・

一夏：「ッ!!効いてない!?どうする!?この状況じゃM82は撃つのは

難しいし!!」

side end

倉田：「!?隊長!!あれ!!」

伊丹：「なんだよ!!っておいおい何で馬車1台を集中的に追いか



てるんだよっ!!」

伊丹達が見たのは、炎龍に追いかけている一夏達の馬車だった。

伊丹：「くそっ!!とにかく助けねえと!!各員!!ドラゴンに集中放火!!注意をこちらに引き付けるんだ!!撃って撃って撃ちまくれ!!」

自衛隊が炎龍に向けて集中放火を開始する。

炎龍は一夏達から標的を外し、伊丹達の車に狙いを変えた…。口から炎を出す用意をして。

伊丹：「!!ヤベエ!!急いで距離を取れ!!」

炎龍：「ぎやおおおおお!!」

車が炎龍から離れると同時に炎が発射される。

倉田：「なんて威力だ…。あれ喰らったら終わりですよ!」

伊丹：「わかってる!!」

その時だった。

炎龍に雷の玉が当たり炎龍が動きを止めた。

一夏の光雷球である。

一夏：「今だ!!【○○!!】あ…。」

一夏は日本語で言うつもりが最近の癖で特地の言葉で言ってしまった。

だが、言いたいことが通じたのか

伊丹：「!!今がチャンスだ!!勝本!!LAMだ!!」

勝本：「了解!!」

伊丹が勝本にLAMで攻撃するように指示する。が…

勝本：「おっと、後方の安全確認…。」

伊丹：「してる場合か!」

倉田：「いいから、速く打て!!」

勝本がLAMを発射しようとした時だった。

勝本：「うおっ!!?」

バシユツ!!

勝本の乗った車の車輪が段差に乗って車が激しく揺れてしまい、その振動でトリガーを引いてしまう。

一夏：「ガク引き!? ヤベエ!! ギリギリ届かねえ!!」  
その時炎龍が急に空中でよろめいた。

レレイ：「! あれってハルバート!? しかもあれって亜神の使うやつに似てる!?!」

そう、炎龍がよろめいた理由は、たまたま伊丹の車に乗っていた亜神のロウリイ・マーキュリーが自分のハルバートを投げて炎龍を攻撃したのである。

その攻撃が功となりLAMは炎龍の腕に直撃する。

炎龍：「ギイヤアアアアアア!!」

炎龍の右腕はLAMの一撃で破壊され、その痛みで炎龍は悲鳴上げ逃げていった。

一夏：「おわっ… た」  
バタリッ!

レレイ：「イチカ!?!」

一夏：「くそ… 魔力… 使いすぎた…」

一夏は光雷球を自分の出せる全ての魔力を使い、発動した。  
そのため、魔力切れを起こし、倒れてしまった。

一夏：「悪い、レレイ。ちよつと寝るわ… なんかあったら起こしてくれ…」

レレイ：「わかってる… ゆっくり休んで…」

こうして一夏達の逃避行は幕を閉じようとしていた。

## 到着！自衛隊基地

到着！自衛隊基地

炎龍の襲撃を何とか切り抜けた自衛隊と避難者達。

基地について最初にしたことは、何人の避難者がこの基地にいるか調べる事だった。

避難者は自分の名前を自衛隊の隊員について話していく。

そして一夏達の順番になった。

カトー：「わしはカトー・エル・アルテストアン。隣はわしの弟子と助手の・・・」

レイ：「レイ・ラ・レーナ。私の隣は、イチカ・オリムラ。彼は昨日魔法を使いすぎたため、眠った後、私が追加で回復魔法をかけた。もう少ししたら、目を覚ますはず。」

伊丹：「イチカ・オリムラ：日本人みたいな名前だな・・・それにオリムラか・・・後で話してみよう。次の人お願いします。」

(※思いつきり日本人です。)

数分後・・・

一夏：「ふあゝ」

レイ：「あ、起きた？」

一夏：「レイか・・・つてここは・・・？」

レイ：「緑の人の拠点。二時間位前に着いた。」

一夏：「そうか。【ミナサン】うん？なんだ？」

一夏達は声が出た方へ向かう。

伊丹：「コレカラ、ミナサンノ、イエ、ツクルツ!! ミナサン、ジュンビ、シテ、イドウ!!」

→

特地の言葉を片言で話してる。

避難者：「??？」

一夏：「・・・酷すぎる・・・しかも全然通じてない・・・」

伊丹：「あれ？」

倉田：「隊長・・・片言過ぎて全然通じてないですよ・・・」

一夏：「・・・行くか・・・其処の人、ちよつといいですか？」

伊丹：「日本語!? ってあんたさっきの寝てた人？」

一夏：「俺は日本人ですよ。それより今なんて言おうとしたんですか？俺で良かったら通訳しますよ？」

伊丹：「え、これから皆さんの家を作るので、準備して移動してくださいって言おうとしたんだ。」

一夏：「分かりました。○○!!○○○○。○○、○○○○。」

避難者：「分かりました」

避難者達は一夏の言葉を聞いて行動を開始する。

一夏：「こんな感じで良いですか？」

伊丹：「ああ、助かったよ。所で何で特地の言葉を話せるんだ？」

一夏：「簡単ですよ、二年前にこつちに来て、レイレイ達に言葉と文字教えてもらって、元に帰る方法を探してたんです。それで話せるようになったんです。」

伊丹：「ちよつと待て!!二年前!？」

一夏：「はい。」

伊丹：「それおかしいぞ?!日本に門が開いたのは最近だぞ?!」

一夏：「えーと、俺がこつちに来る前は○○年のドイツにいて、第二回モンド・クロツソを見に行ってたんです。」

伊丹：「成る程って待て待て!!第二回モンド・クロツソ?もしかして、君は行方不明になった織斑千冬の弟か!？」

一夏：「!!そうです!!」

伊丹：「そうか!!これはあいつに良い報告が出来る!!」

一夏：「あいつ?」

伊丹：「君の姉だよ!!」

一夏：「ええ!!知り合いなんですか!？」

伊丹：「ああ!!高校時代からの友人だ!!」

一夏：「あの千冬姉に友人が・・・千冬姉とつるんでる人って東さん位だと思ってましたよ。」

伊丹：「確かにアイツは誰かとするんだけりはあまりしなかったからな・・・」

一夏：「あ、あの、モンド・クロツソの結果はどうになりました？」  
伊丹：「アイツは優勝したけど、君が行方不明になってしばらくは酷かったらしい。けど最近は何とか持ち直してIS学園の教師をしている。」

一夏：「あの千冬姉が教師!?!」

伊丹：「いつてやるな…… 確かにイメージしにくいとは思うけど……」

一夏：「と、とにかく、もし千冬姉に連絡出来るなら連絡したいです。」

伊丹：「今は無理だけど連絡出来るようになったら教えてやるよ。」

一夏：「お願いします。何か特地の言葉で分からないことがあったら言ってください。通訳しますよ。」

伊丹：「助かる。と、そろそろ行った方が良いぞ。隣の子が着いていないから。」

一夏：「あ、悪い、レレイ。」

レレイ：「大丈夫、それより速くしないと…… お師匠が待ってる。」

一夏：「だな。えつと……」

伊丹：「あ、名前教えてなかったな。俺は伊丹だ。何かあったら言うてくれ。俺に出来ることがあれば協力する。」

一夏：「分かりました。レレイ、行こう。」

一夏達は伊丹と別れ、カトーが待っている場所に歩き出す。

これが、後に炎龍を倒す英雄達の最初の対談だった。

そしてこの出会いが一夏の物語を急速に加速させる……

## イタリカに行く前に

イタリカへ行く前に

一夏達が自衛隊基地について4日がたった。

一夏は伊丹にある相談をしていた。

side：自衛隊基地

伊丹：「イタリカ？」

一夏：「はい。ここから一番近い商業が盛んな国です。」

伊丹：「何でそのイタリカだっけか？そこじゃないといけないんだ？他の国でもあの翼竜の鱗は売れるんだろ？」

一夏：「売れるちゃ売れるんですけど…鱗一枚が結構高い上に数が多いすぎますよ。だから、そこじゃないと一気に売れないんです。それにイタリカ周辺は最近治安が悪くなっているんで、下手したら盗賊に襲われるんです。」

伊丹：「成る程な…わかった。ちよつと上に話してみるわ。」

一夏：「お願いします。」

一夏が伊丹に相談したこと…それは翼竜の鱗を売るために自衛隊にイタリカまで送ってもらうことと、炎龍や盗賊に襲われないように護衛してもらうことだった。

実はイタリカ周辺は数ヶ月前から治安が悪くなっており、力のない人間は盗賊にとってはカモであり、さらに翼竜の鱗を運んでいるとわかったら嬉々としてその人間を襲うだろう。

そのため一夏は避難者達に自衛隊に協力してもらうことを提案した。

一夏：「しかし…自衛隊は相当な数の翼竜を倒したんだな…」

自衛隊はかなりの数の帝国軍を倒しており、その軍の部隊には翼竜に乗った兵が多くいた。

しかし、自衛隊の銃撃によって簡単に討ち取られ、大量の翼竜と兵の死体を出す。

レレイ：「イチカ、ちよつと良い？」

一夏：「うん？レレイか。どうした？」

レレイ：「イチカは自衛隊が持っていた武器と似たやつを持っていた。ちよつと見せて貰っても良い？」

一夏：「え？銃を？何で？」

レレイ：「その、銃？の仕組みを知りたい。」

一夏：「いいけど…銃の種類はどうするんだ？銃って結構種類があるぞ？」

レレイ：「それはイチカに任せる。」

一夏：「りよーかい、とりあえず、ハンドガンとサブマシンガンにしかとくか…それなら幾つか予備あるし。」

一夏は、収納装置からハンドガンのベレッタM92Fとコルト・カバメント、サブマシンガンのVZ61をレレイに渡す。

レレイ：「？大きさと形が全然違う…」

一夏：「銃には色々種類があつて、銃弾…弓矢で例えると矢の部分だな。それを一回一回単発で発射するもの、連続で弾を発射して攻撃するもの、遠くの敵を狙って攻撃するものって感じで銃の種類によって使い分けをしないといけないんだ。」

レレイ：「今渡してくれた銃はどんな特徴があるの？」

一夏：「そうだな…この小さい銃はハンドガンって言うんだけど、これは日本の言葉じゃ無くて、日本じゃ拳銃って言ったりする。こいつの特徴は携帯性に優れてることだな。ハンドガン系は基本的持ち運びがしやすいし、整備も簡単に出来る。それに反動が小さいから撃ちやすい。あと、基本的にハンドガンは単発が多いな。短所は威力が小さいってところかな？それでも急所に当たったら人は簡単に死ぬ。」

レレイ：「じゃあこれは？」

レレイはVZ61を一夏に見せる。

一夏：「それはスコープオンって言うサブマシンガンだ。正式名称はVZ61って言うんだ。サブマシンガンは基本的に弾を敵に連続で叩き込むことが出来る銃だ。長所はさっき言ったみたいに弾を連続で叩き込むことが出来ること、弾を多く入れることが出来る、携帯性に優れてることだ。短所は弾を一気に消費する事、ハンドガンに比

べて反動が強い事だ。」

レイ：「他には銃の種類はあるの？」

一夏：「あるよ。遠くの敵を攻撃するスナイパーライフル、物を破壊する対物狙撃銃、自衛隊が持っていたようなアサルトライフル、小さな弾を広い範囲に撃つショットガンとかな。けどその辺はまた今度にしよう。」

レイ：「わかった。分からないことがあったら教えてくれる？」

一夏：「いいけど、自衛隊の人の方が基本的に詳しいと思うぞ。俺は銃の種類とその特徴はある程度説明出来るけど、専門的なことは説明出来ないからな。」

レイ：「わかった。その時は自衛隊に聞いて見る。」

一夏：「一応弾は抜いてあるから暴発とかはないはずだけど、取り扱いには気をつけてくれ。」

レイ：「わかった」

レイはその後一夏と別れ、自分の部屋で銃を研究し、魔法の改良に使えるものを見つけた。

しかし、試しに使ってみたところ魔力を大量に消費したため、まだ改良が必要だということが判明し、実用レベルになるまでその魔法を封印する事にした。

その2日後...

Side：一夏

一夏：「ついにこの日が来ましたね!!」

伊丹：「ああ!!行くぞ!!」

一夏と伊丹は仮設テントの扉を開き、服を脱いだあと、ある場所に飛び込んだ...

ザボンッ!!

二人：「ああ〜」

一夏達が飛び込んだ場所...それは風呂である。

今日は自衛隊基地に特地の湯という仮設の風呂が出来たのである。

一夏は元々風呂好きだったが、レイ達の部族の風呂はほとんどが水風呂で、風呂に入った感があまり感じないため、日本の風呂が恋し



くなるが多かった。

そのため一夏はこの日を楽しみにして待っていた。

一夏：「やっとまともな風呂に入れた〜」

伊丹：「そこまで酷かったのか？」

一夏：「レイレイ達の一族は流浪の民だから、お湯じゃなくて水の風呂が多かったんです。」

伊丹：「そりゃキツいな...」

一夏：「レイレイもこっちの方が好きだと思いますよ。冬はとても寒いからです。」

一方その頃...

side change

side：レイレイ

レイレイ：「あつたかい...」

ロウリイ：「こんなところに浴室を作るなんて...」

レイレイ：「神官様はこみみたいなお風呂に入ったことは？」

ロウリイ：「ロウリイで良いわあ。神殿に広い浴室はあるけどあまり入ったことは無いわあ。色んなところを旅をしたからねえ... あなたは？ええと...」

レイレイ：「私はレイレイ・ラ・レレーナ。レイレイで良い。私は流浪の民の一族。お風呂は基本的に水浴びですましている。あなたは？」

レイレイの視線の先には、エルフのテユカがいた。

テユカ：「え？ええと、私も水浴びですましているわね。」

ロウリイ：「成る程ねえ。」

レイレイ：「しかし、イチカの言っていたことは本当だった。お湯の方がとても落ち着く。」

ロウリイ：「そのイチカっていうのはあなたと一緒にいたあの子？」

レイレイ：「そう。イチカは伊丹がいた世界の人間だった。」

ロウリイ：「それは別に良いんだけどお、あの子結構人を殺しているわねえ？」

テユカ：「ええ!？」

レイレイ：「...イチカはこの世界に来る前に誘拐された。何とか逃

げようとしたけど、見つかって殺されそうになった。」

レレイ：「逃げた先にあつた武器で応戦した時に人を殺したって…そのあと、イチカの世界の兵器に乗った人が来て、その人とも戦ってその時の戦いの爆発で、変な渦に入つてこの世界に来た。」

テユカ：「そうなんだ…。」

ロウリイ：「その時はまだ14才でしょ、あの子？よく生き残れたわねえ。」

レレイ：「凄い怪我だったけどお師匠の薬で怪我を速く直すことが出来た。あともう少し遅かったら命はなかった。」

その後、一夏の話題はなくなり、三人は風呂でゆつくりしたあと、自分達の部屋に戻った。

その2日後、自衛隊はイタリカに翼竜の鱗を売ることを支援するため、避難者に協力する事を決定。

その日のうちに基地から出発し、イタリカへ向かい始めた。

## イタリカ防衛戦

イタリカ防衛作戦

一夏達は自衛隊の車でイタリカへ向かっていた。

side 一夏

一夏：「伊丹さん、この調子で進めば、今日中にイタリカに着きそうですよ！」

伊丹：「そうか。しかし、思ったよりもきつくなかったな今回の任務。」

倉田：「前の道は酷かったすからねえ」

一夏：「あと、盗賊とかに遭遇しなかったからですね。」

伊丹：「とにかくこのまま何事もなく終われば良いんだけどなあ」

一夏：「伊丹さん、フラグみたいなこと言わないでくださいよ……  
(キキッ!!) おわっ!!」

倉田：「隊長、前方に煙です。」

伊丹：「おいおい……俺達は何回煙を見ればいいんだ？」

一夏と隣にいたレイは双眼鏡で煙が出ている方向を見る。

レイ：「建物が燃えている……かぎだと思われる。」

一夏：「かぎじゃなくて、火事だよ。」

レイ：「火事。」

伊丹：「そう。って火事？」

一夏：「炎龍に襲われている……って違うな。それならもつと酷いはず。」

ロウリイ：「血の匂い……」

一夏：「え？」

伊丹：「どういうことだ？」

ロウリイは舌舐めずりをしながらこういった。

ロウリイ：「戦いよお……速く暴れたいわあ……」

一夏：「戦い!?伊丹さん、どうします!?!」

伊丹：「……とにかく状況を確認しないと……各員、警戒を厳にしてイタリカへ前進。何が起こるか分からないからな……何かあつ

た時は報告、敵対する意思がある場合は各自の判断で発砲を許可する。」

栗林：「了解!!」

一夏：「ちよつと待つてください。もし、市民が話をしたいと言ってきた時は俺かレレイに通信をお願いします!!もし本当に戦いがあったら救援を求められる可能性が高そうです!!」

桑原：「わかった。もし、問答無用で襲いかかって来たときは、反撃させて貰うが良いな?」

一夏：「分かりました。レレイもそれでいいか?」

レレイ：「わかった。」

伊丹：「他に何かあるか?無かったらイタリカに接近するぞ。」

side change

side：イタリカ

一夏達はイタリカの門の近くまで来ていた。

そこで一夏達が見たものはボロボロになった門の扉だった。

テユカ：「酷い...」

一夏：「どうやら、ロウリイが言っていたことは本当みたいだな...」

伊丹：「それに、これは戦いが終わってあんま時間がたってないな...」

テユカ：「とにかく誰かいないか聞いてみないと... ○○○!!○○○○!!」

○○!!」

テユカが特地の言葉で誰かいないかを聞く。

伊丹：「反応がないな...」

一夏：「とにかく、門が開くか確かめましょう。」

伊丹：「そうだな。とりあえず俺が一番前に入る。一夏は悪いが俺の後ろを頼む。」

一夏：「分かりました。」

一夏は収納装置からM4を取りだし、伊丹と一緒に扉の前に接近する。

伊丹：「うん?何でお前銃持ってたんだ?」

一夏：「あれ?言ってますませんでしたっけ?誘拐された時に銃が入ったコンテナと収納装置を見つけて応戦したって。」

伊丹：「聞いてねえよ!?!とにかく後で詳しく聞かせ(バギツ!!)ろおが!?!」

一夏：「伊丹さん!?!」

扉がいきなり勢いよく開き、伊丹に直撃する。

一夏は慌てて、M4を構え、何時でも撃てるようにセーフティを解除する。

一夏：「くそっ!! 一体何「よく来てくださった!!」って、は?」

side out

数時間後...

side イタリカ南門

一夏：「... どうしてこうなった?」

伊丹：「しょーがねーだろう、まさかイタリカが敗残兵に襲われるなんて誰も予想してなかったんだからよお」

一夏：「まさかイタリカで戦闘するようになるとは思いませんでしたよ... 一応とっておきが使えるようになってたからまだ良いんですけど...」

レレイ：「とっておき?」

伊丹：「それはなんだ? さっきの銃以外に何かあるのか?」

一夏：「えーと、出来れば使いたくないですけど本格的にヤバくなったらそれを使いますよ。俺達の世界で使ったらとてつもなくめんどい事になるし... あ、レレイ、ちよつといいか?」

レレイ：「?何?」

一夏：「一応これ渡しとく。使い方は分かるか?」

一夏は収納装置からVZ61とベレッタM92Fを取りだし、レレイに渡す。

レレイ：「一応分かる... けど良いの?」

一夏：「念のためだ。お前の事だ、近くで様子見たりしたがるだろうからな。殺されそうになった時に使え。」

レレイ：「わかった。【オオオオオオオツツ!!!】!?!」

伊丹：「!! 始まったか!?!」

一夏：「こつちにはまだ敵影は確認出来ていません!! 奴ら北門を集

中のに攻撃しているみたいですよ!!」

栗林：「隊長!!援軍が到着するまでもう少し時間がかかります!!どうします!?!」

伊丹：「仕方ねえ... 部隊を2つに分ける!!一夏、栗林、富田、レレイは俺と一緒に... ってあれ?ロウリイは?」

一夏：「まさか... 【どわあああああつ?!?!】 ってやっぱりか!!」

ロウリイはすでに戦場に向かっており、敗残兵を次々と殺していた。

一夏：「伊丹さん!!」

伊丹：「わかってる!!今呼ばなかったメンバーはこの監視を頼む!!なんかあったら無線で連絡!!良いな!!」

自衛隊十一夏：「了解!!」

sidechange

side：イタリカ北部防衛ライン

一夏達と自衛隊が悲鳴がした場所のみたものは、大量の敗残兵とそれを次々に殺していくロウリイの姿だった。

伊丹：「!!着剣!!」

伊丹達は持つている銃に銃剣を装着する。

栗林：「てやあああああ!!」

栗林は伊丹の合図を待たずに突撃を開始する!!

一夏：「ちよつと!!栗林さん!?!」

富田：「何やってんだ!!あのバカは!?!」

伊丹：「言ってる場合か!!支援するぞ!!とつげきにいーまえへ!!」  
ズガガガガッ!!

一夏達は持つている銃で栗林とロウリイを援護するが...

伊丹：「くそっ!!数が多すぎる!!」

富田：「!!隊長!!後ろから増援多数!!」

伊丹：「おいおい!!これはヤバイぞ!!あつちは栗林達がいるから大丈夫だがこつちは三人じゃあキツイぞ!!」

一夏：「... 仕方ねえ!!伊丹さん!!とっておきを使う!!一分で良い!!時間を稼いでください!!」

伊丹：「わかった!!いそいでくれよ!!」

一夏：「分かっていますよ!!」

一夏はとっておきを使うため収納装置からあるものを取り出す。収納装置から出て来たものは指輪だった。

一夏は指輪を装着したあと、すぐにこう叫んだ。

一夏：「展開!!プラファール!!」

一夏が叫んだと同時に指輪から光が発生。光が収まるとそこには世界最強と呼ばれた兵器、ISを装着した一夏がいた。

レレイ：「?鋼鉄の鎧...?」

伊丹：「!?何で男のお前がISを!」

一夏：「そんなの俺にも分からないですよ!!とにかく使える物は使わして貰う!!」

一夏はマシンガンを二つ取り出して敗残兵に向けて撃つ。

ズガガガガガッ!!

敗残兵：「ぐああああつ!!?」

一夏：「次はコイツだ!!うおおおおつ!!」

収納装置からガトリング砲を取り出し乱射する。

伊丹：「これなら...一夏!!そっちはお前に任せる!!俺はお前の後ろを守る!!富田!!お前は栗林達を頼む!!」

一夏・富田：「了解!」

一夏達は確実に敵の数を減らしていく。

一夏：「残りの弾は...くそっ!!あんま残ってねえ!?ならっ!!」

一夏は残りの弾を全て撃つて敵の数を減らすと、最後の射撃武器を取り出す。

富田：「!?六連装ミサイルランチャー!」

一夏：「こいつで...まとめて吹き飛ばええええ!!」

ボボボボボッ!!

ランチャーからミサイルが発射される。

ミサイルは敗残兵に直撃する。

敗残兵：「どわあああああつ?!?!?」

敗残兵：「に、逃げろおおお!!」

ミサイルによって多数の死者が出たため、敗残兵は逃走しようとするが…

空挺団：「こちら空挺団!!カウント10で門内の敵を掃討する!!至急待避されたし!!繰り返し!!至急待避されたし!!」

一夏：「いいっ?!レレイ!!いそいでここから離れるぞ!!民間人の方も急いでそこから離れてくれ!!」

レレイ：「?何で?」↑無線の意味が解っていない。

一夏：「良いから速く!!」

一夏はレレイの手をつかみ、急いで安全な場所まで逃げる

その次の瞬間…

ズガガガガッ!!

バシユツ!!バシユツ!!バシユツ!!

空挺団のヘリのガトリング砲とミサイルランチャーが火を吹いた。ヘリの攻撃は敵を容赦なく殺していく。

攻撃が止まり、攻撃による煙が無くなるとそこには大量の死体があつた…

この光景を見た帝国の姫、ピニヤ・コラーダは後にこう語った。

鉄の天馬が人間の尊厳を無視して敵を情け容赦なく殺していった。

もしこのまま日本に攻め込めれば私達帝国軍はあつという間に殺されてしまう。

妾は帝国と日本の戦争を避けなければならないと思い、和平交渉をする決意をした。

和平交渉が上手くいかなければ帝国に未来はない…

だから持てるコネを全て使っても和平するべきだとそう思ったのだ…

こうして、イタリカ防衛戦は終結。この戦いから、帝国の歴史が変わろうとしていた…



## 現IS設定及び状態

機体名：プロト・ラファール・リヴァイブ（中破）

世代：第2世代

装備（現在一夏が持っている装備）

マシンガン×2

ガトリング砲×1

六連装ミサイルランチャー×1

専用シールド×1

近接ブレード×1

空きスロット多数

各部位ウエポンラック多数

機体解説

第2世代機のラファール・リヴァイブの試作機。

基本スペックは正式機に比べると少し劣るが、それでも第三世代にも負けない性能を持っている。

装甲はあまり硬くないが、機動力は高く、その他性能も第2世代機の中ではトップクラスの高さである。

武装は第三世代に比べると劣るがそれでも多彩な武器を粒子転換して収納できるため様々なスタイルで戦うことが出来る。

各部にあるウエポンラックは様々な装備を装着可能。現在は所持していないが、追加のブースター、大型シールド、専用ミサイルランチャー、着脱式チョバムアーマーを装着する事が可能。しかし、それによって機動力が低下する可能性がある。

上記以外の大半の武装は現在、一夏誘拐時の戦闘によって故障しており、修理しないと使えない状況である。そのため本来の豊富な武装を使った戦術で戦うことが出来ない。

また、装甲なども損傷しているためISの武器による攻撃を受ければ確実に撃破される状況であるが、それでも通常の銃や剣などによる攻撃はいつさい通じないので、何かの拍子で機能が停止しない限り、ISの持つ耐久性で敵の攻撃を無効にする事ができる。

評価（高S↑A↑B↓C↓D↓E低）

本来のスペック

装甲C

武装A↘C（大量の武器を使うため、正確な数値は出せない）

機動力A

戦術S

現在のスペック

装甲E

武装C

機動力C

戦術D

装備説明

マシンガン

イメージはM4

カスタマイズで様々な機能をつけることが可能。現在一夏が選択しているカスタマイズはレーザーサイト+後付けグレネードランチャー（どちらかしか使えない。基本的にレーザーサイトを使用）

ガトリング砲

イメージはガンダムG05のガトリング砲

かなりの威力を誇るガトリング砲。

発射速度はかなり早いですが反動が高めなので扱いには注意が必要。

六連装ミサイルランチャー

イメージは陸戦型ガンダムのミサイルランチャー

威力の高いミサイルを連続発射する装備。

威力が高い代わりに発射速度が遅め。

トリガーは折り畳み式で肩のアタッチメントに装着することが可能。  
能。

専用シールド

かなりの強度があるシールド。アタッチメントに装着する事が可能。

## 近接ブレード

イメージはグフのヒートサーベル

切れ味抜群。もし切れなくても、熱によるダメージで徐々に深刻な被害を出すことが出来る。

帰還・・・そして・・・

side：アルヌス自衛隊基地

伊丹：「くそ・・・酷い目にあつた・・・」

一夏：「まさか、ピニヤ殿下の騎士団に盗賊と間違えられるとは思いませんでしたよ・・・」

伊丹はここに帰る途中ピニヤの騎士団である薔薇騎士団にボコボコにされてしまい、体の各所に傷が出来てしまう。

伊丹：「それはともかく・・・何でここにピニヤ殿下がいるんだ？俺達日本に戻るはずだったんだが・・・」

柳田：「それなんだが悪いがピニヤ殿下と騎士団の一人を同行させてくれ。」

伊丹：「はあああああ!?!何でだ!?!俺達今回休暇の筈だぞ!!」

一夏：「落ち着いてください・・・おおかた今回の和平交渉の案内と護衛でしょ?」

柳田：「そうだな。それが終わったら、今度こそ休暇だ。」

ピニヤ：「急ですまぬがよろしく頼む。それと、伊丹殿先日はこちら手違いで不快な思いをさせてしまい申し訳ない。」

伊丹：「あ、いえ、自分はもう大丈夫ですから。」

レイ：「一夏、一夏達の国はどんなところなの?」

一夏：「そうだな・・・ここより緑は少ないが技術が発展して人が暮らしやすいところかなあ?」

レイ：「そう。早くいつてみたい。」

一夏：「・・・そうだな・・・」

レイ：「一夏?」

一夏：「あ、そうそう、あつちは冬だから暖かい格好でいかないとヤバイぞー」

レイ：「あ、うん。」

その数時間後一夏達は門を通じて日本へ帰還した。

side：日本

レレイ：「一夏、ここが？」

一夏：「… ああ、これが俺があつちに行く前にいた世界で、俺が住んでた街が俺の記憶に間違いが無かつたらちよつと遠いけどあつた筈だ…。」

レレイ：「そう…。」

伊丹：「おいそろそろ行くぞー」

一夏：「分かりました!!レレイ、行こうぜ。」

レレイ：「うん。」

栗林：「ウソヨ… ウソヨ… ソウダ!!コレハユメ!!ユメナンダワツ!!アハハツ!!アハハハハハ!!」

一夏：「つてこわつ!!ちよつと!!栗林さん!?!落ち着いて!?!てか、何があつたらこんな風になるんですか!?!」

伊丹：「詳しいことは聞くな… 思い出したら地味に腹立つから…。」

一夏+レレイ：「??？」

伊丹：「そろそろ出るぞ。運転手さん、出してくれ。」

伊丹の指示でバスが動き出す。

冨田：「で、何処からいくんですか？」

伊丹はテユカを指差しながら言った。

伊丹：「これから国会に行くのに、ジーンズはダメだろ…。」

一夏：「確かに… ってことは…。」

某スーツ専門店でテユカの服を用意したあと、とある場所で昼食をとることにした。

伊丹：「じゃあ、ここで飯食うぞ。」

冨田：「… 何で牛井何ですか?ピニヤ殿下がいるんだしもつと良いところの方が良いと思いますけど…。」

伊丹：「今回は出張扱いだから昼飯代が少ないんだよ。」

栗林：「納得です。」

伊丹：「それに牛井は安い、速い、旨いのが特徴だからな。」  
という訳で食事中

一夏：「ああ、この味、懐かしいなあ…。」  
久しぶりに食べた牛丼に感動する。

特地のメンバーも牛丼の美味しさに大満足していた。  
食事が終わった後一夏達は国会議事堂にいた。

今回一夏達は特地のことと炎龍襲来時のことについて説明するため国会に参加する事になった。

それは特地について詳しい説明を世界に発信する最初の議会だった。

今回説明する順番は伊丹↓レレイ↓テユカ↓一夏↓ロウリイの順番である。

伊丹、レレイ、テユカへの質問及び説明が終わり、一夏の番になった。

議員：「では名前をお願いします。」

一夏：「自分は織斑一夏。年は16です。」

議員：「!?あなたは日本人ですか!？」

一夏：「こんな服装ですけど俺は生まれも育ちも日本ですよ。」

一夏が着ている服装はレレイ達の部族の伝統衣装であり、間違えるのは無理もなかった

議員：「し、失礼しました。では質問を開始させていただきます。最初に東京に門が開かれた時の状況を説明してもらってもよろしいでしょうか?」

一夏：「すみません。俺が特地行く前にいた場所は東京じゃありません。」

議員：「どういう事でしょうか?」

一夏：「俺が特地に行く前にいた場所は今から二年前のドイツです。」

議員：「ええ!？」

ぎわぎわ ぎわぎわ

一夏：「えと、説明しても?」

議員：「は、はい。」

一夏：「俺はあの日第二回モンド・グロツソに出場する姉を応援する

ためドイツにいました。会場で応援していると係員を名乗る男に姉が呼んでいると言われ、姉がいると言われた部屋に行きました。」

議員：「ちよつと待つてください。あなたの姉？あと織斑？もしかしてあなたの姉は…。」

一夏：「そうです…俺の姉は織斑千冬です。」

議員：「やっぱり…続けてください。」

「けど部屋に入った瞬間に変な集団に襲われ、抵抗する間もなく、何処かの倉庫まで連れ去られました。何とか隙を探して脱出しましたが、すぐに見つかって別の倉庫が開いていたのでそこに隠れることにしました。」

「その倉庫の中に大量の武器が入ったコンテナがありました。武器が有れば抵抗できると思ってコンテナから武器と収納装置を取り出して、持つてるだけの装備を持ちました。それと同時に誘拐犯が倉庫の中に入ってきて、見つかりそうになってやむなく、銃で誘拐犯二人を殺しました。」

「あと一人って思ったら今度はISまで来てミサイルとか撃つてきました。けど何とか撃破したのと同時に倉庫が爆発してその爆風で気を失って、気がついたらレイの家にいました。」

議員：「……………」

あまりのことに周りが言葉を失う。

女議員：「う、うそよっ!! ISがあんたみたいな男に倒せるわけがないじゃない!!」

女議員：「そうよ!! そうよ!!」

一夏：「あんたらは馬鹿か？確かにISは強いだろうけど、無敵じゃない。シールドエネルギーと絶対防御が切れば普通の武器でも通じる。それに俺が使った銃と弾はAISだ。一発の威力が少なくとも連続で攻撃すれば大きなダメージになる。」

女議員：「くっ…。」

一夏：「この際だが言っておく。近年問題になってる女尊男卑でISに乗れない、乗ってない女が好き勝手にやってるが、その人たちはどんな理由で男より上だと思ってるんだ？ISが最強だからISに

乗れる女が優れているとか思ってるんなら大間違いだ。」

「確かにISに乗ってる状況なら女は強いだろう。けど乗ってなかったら男は女よりした下とは限らない。もし女の方が偉いから男に何をやっても構わないって思ってるんなら考え直した方が良いでしょう？」

議員：「成る程… 確かに…」

一夏：「なんか、すいませんね。16のガキが偉そうに…」

議員：「いえ、構いません。最近はこの問題も酷くなっていますから… 話を戻しましょう。二年前ということは二年間特地で生活していたということになりますが、特地で、何をしていたか等を教えてください。」

一夏：「そうですね… 最初にさつきはなした戦いの怪我を治したあとレイと師匠の手伝いをしながら魔法を教わったり、日本に帰る方法を探したり、特地の言葉を話す、書く、聞けるようになるために勉強したりですね。言葉による問題は目を覚ましてすぐのアクセシビリティで何とかかなりましたし？」

議員：「ま、まほう？ いやその前にアクセシビリティとは？」

一夏：「レイの師匠が治療薬と間違えて開発中の新薬を俺に飲ましたんですよ。いやああれはひどかった…」 ↑遠い目

議員：「な、何かすいません… 次にその魔法？ なんですすが本当に使えるんですか？」

一夏：「簡単な攻撃系と基礎的な物なら。危ないからここでは使えないですけど。」

レイ：「一夏、ものを浮かす魔法は大丈夫。」

一夏：「そうか、じゃあちよつとだけ見せます… よつと」

一夏は魔法でたまたま持っていたペンを魔法で浮かせる

議員：「おおっ!？」

議員：「凄いぞ…」

一夏：「こんな感じですね。他に質問は？」

議員：「い、いえ、もう大丈夫です。ありがとうございます。こうして一夏への質問は終わった。」



その後女議員がロウリイに言葉による一撃でノックアウトされ、これ以上の質問は行われなかった。

その後一夏達は指定された宿に行こうとするが何者かによる妨害を受ける。

伊丹：「仕方ねえあそこに向かうか…。」

伊丹は元妻の莉沙が住んでいるマンションに向かうが…

伊丹：「あれ？おかしいな… 表札が変わってる。」

事情を聞くと莉沙は数ヶ月前に引っ越したそうだ。

一夏：「伊丹さん、俺にあてがあります。」

伊丹：「？何処だ？」

一夏：「俺んちですよ。ちよつと遠いけどそこなら全員入れるし、裏口の鍵の場所変わって無かったら普通に入れますしね。」

伊丹：「成る程… 案内してくれ。」

一夏：「了解です。じゃあついて来て下さい。」

side：織斑家

千冬：「すまないな家の掃除を手伝ってもらって。」

箒：「大丈夫ですよ。ちようど空いてましたし。」

鈴：「しかしあの千冬さんが家事出来るようになるとは思いませんでしたよ。」

千冬：「鈴、それはどう意味だ？」

鈴：「あ、いや、アハハハ…。」

千冬：「本来なら同居人に手伝って貰うのだが締め切りが近いみたいだな。」

箒：「締め切り？」

千冬：「何でも同人誌を描いてるみたいなんだが、あんまり見ない方が良いらしくて、そいつの本は読んだことないけどな。」

ピンポン

鈴：「あ、あたしが出ます。」

千冬：「頼む。」

玄関

鈴：「はい、どちらさ…ええ!？」

箒：「どうした？鈴って嘘ツ!？」

千冬：「お前らうるさい、何があつたん、だああああ!？」

一夏：「ただいま…千冬姉…鈴と箒も久しぶりだな…」

三人：「一夏!!」

三人は一夏に抱きついた。

千冬：「ほ、ホントに本当に一夏なんだな!？」

鈴：「二年間ずっと待ってた!!やっ与会えた!!」

箒：「良かった!!本当に良かった!!」

伊丹：「ううっ良かったな一夏…」

感動の再開に涙を流す一同だったが…

莉沙：「終わったアアアア!!ってあれ？何でヨウジがいるの？」

伊丹：「莉沙!?!っってお前感動の再会を台無しにするなアアアア!!」

なんともしまらない終わり方になってしまった。

## 想いと天災襲来

伊丹：「で？」

莉沙：「で？」

伊丹：「な、ん、で!!お前が!!千冬と一夏の家!!いるんだよ!!」  
伊丹は何故莉沙が一夏達の家にいるかの理由を聞こうとしていたが...

莉沙：「ち、ちよつと、せんぱい!!落ち着いて!!」

キレ気味に叫んでたたためとてもじやないが話しにくい状況になっていた。恐怖のせいか、莉沙は昔の呼び方で伊丹に声をかけていた。

(※伊丹は莉沙の先輩だった。)

千冬：「私が頼んだんだ。私の今の仕事のせいでなかなか家に帰れないから家賃なしで住ませる代わりに家の管理を頼んでたんだ。」

一夏：「それってI S学園の教師のこと？」

千冬：「そうだ。って何で知ってる？」

一夏：「伊丹さんが教えてくれた。しかしまさか教師になってるって聞いたときはびっくりしたよ。」

千冬：「成る程な。ところで後ろにいる人は誰だ？」

伊丹：「特地参考人招致で来た特地の人間と俺の部隊のメンバーだ。今日の朝にメールで一夏が特地について今回の参考人招致に出るって入れた筈なんだが？」

千冬：「...いろいろあって昨日の夜に粉碎してしまった...」

特地メンバー以外の全員：「何で!？」

千冬：「いや、ちよつとな...変な電話とメール、女からの告白電話が最近酷くて...つい殺ってしまった。」

一夏：「字が違う!?!何を殺したの!?!人殺してないよね!?!」

千冬：「まあ、それは置いといて「置くな!!」置いとく!!その特地の人を紹介してくれ」

伊丹：「そうだ。お前ら、悪いけど自己紹介頼む。」

自己紹介中...完了

千冬：「で、お前は学校はどうするんだ？こっちにもどって来たんだし、これからのことを考えないとな。」

一夏：「…その事、なんだけどさ…」

一夏：「俺は、また特地に戻る…今日、日本にもどって来たのは特  
地参考人招致で一時的にもどって来たんだ…」

三人：「な…」

千冬：「どう言うことだ…」

一夏：「俺は特地の生活に気に入ってるんだ。別に日本で暮らしたくないってわけじゃない。けど、どっちか選べるなら俺は特地で生活したい。」

一夏：「今の特地と日本の問題は結構厳しい状況なんだ…自衛隊は特地の言葉を話すことができる人はとても少ない、言葉が通じないから特地の人と揉めることだってあった。」

一夏：「俺は特地と日本が揉めて戦争とかになったりするのが嫌なんだ。故郷と特地で世話になった人達が戦争で死ぬのは嫌なんだ。だから俺は世話になった人達に恩を返したい。」

一夏：「俺は特地の言葉で会話ができるようになってるから、通訳したり言葉を教える事が出来る。それに…守りたい人が出来た…そいつを守るためなら俺は何でもする…」

一夏は隣にいるレレイの頭を撫でる。

二人：「な…」

千冬：「そうか…やるならしっかりやれよ…」

一夏：「わかってる。ちよつとでもこっちに帰れそうなら顔を見せに行く。」

箒：「ま、待て一夏!!その時は私達にも会いに来い!!」

鈴：「そ、そうよ!!絶対だからね!!」

一夏：「わかってるって。」

千冬：「しかし…危険ではないのか?もしあのとときみたいに誘拐されるって事があったら…」

一夏：「それについては大丈夫。こいつがあるし、魔法も使える。」

一夏は収納装置からA I SハンドガンとイサカM37を取り出し

て千冬達に見せる。

千冬：「な?! AISだ?! お前何でそんなものを!？」

千冬はAISを見て驚く。

それはそうだろう。自分の弟がいきなり銃、しかも自分達の世界で最強と呼ばれた兵器を破壊することが出来る代物を持っているところを見たからだ。

一夏：「二年前のあの日誘拐されて逃げた先の倉庫で大量の銃とこいつ、その他装備品が入ったコンテナがあつて、その銃で誘拐犯二人とISを一体を殺った。あと特地でイタリカつていう町を守るための作戦にも参加した。」

千冬：「そうか...」

一夏：「後悔はない。誘拐されたときはやらなければこつちが殺されるし、イタリカの戦いでも、敗残兵が市民達を殺して、金や女とかを根こそぎ奪おうとしてた。」

箒：「なんて奴らだ...」

鈴：「酷い...」

一夏：「その時はとっておきを使って敗残兵を倒したけどそのあとの空挺団のヘリの攻撃は凄かった。」

鈴：「空挺団のヘリの攻撃?」

一夏：「ガトリング砲とミサイルブツパ。」

三人：「うわあ...」

一夏：「とにかく、自衛の手段は持つてるから安心してくれ。あとは... 千冬姉、箒、束さんに連絡って出来る?」

千冬：「私は携帯を破壊してしまったから無理だな。」

箒：「私は連絡出来るかもしれない。でもどうして?」

一夏：「ちよつと聞きたいことが【ズドオオオオオッ!!】うわっ!?! な、なんだ!?!」

謎の衝撃が外からした。

千冬：「まさか...」

千冬はカーテンを開けて外を見る。

そこには二エンジンをイメージした小型ロケットが突き刺さつてい

た。

ニンジンが真つ二つに割れ、中から何かが一夏に向かつて突撃を開始する。

???：「いいいいいいくうううううんつつつつ!!!」

一夏：「おわっ?! 【ズガンッ!!】」

いきなり自分に突撃してきた何かを一夏はイサカM37で攻撃する。

(※大変危険です!!絶対真似しないでください!!)

???：「ぐぺっ?!?!」

まともにイサカの一撃を受けた何かはおもいつきり吹っ飛んだ。

一夏：「ヤベッ!!殺っちまった!」

???：「殺られてないよ!!」

伊丹：「どわああああ!! 【ズガンッ!!】」

(※しつこいようですが大変危険です!!絶対真似しないでください!!)

血まみれになった何かを見て驚いた伊丹は一夏からイサカを奪い、何かに向けて発砲する。

???：「ニヤアアアア?!ちよつと?!いっくんもヨージも酷くない!」

一夏：「え?!た、東さん!」

血まみれになった何かの正体は箒の姉であり、千冬の数少ない友人の東だった。

伊丹：「東!?!てか、いきなり突撃されたら誰でもびっくりするわ!!特に俺達とかは銃とかあつたら確実に撃ってるぞ!!」

東：「いや、もう撃ってるよね?!問答無用でいきなりショットガン撃ってるよね!」

一夏：「すいません東さん...身の危険を感じてつい...」

東：「ううんいいよ!!次からは気をつけてね。さて、いっくんは私に用があるみたいだけどどういう用件かな?」

一夏：「実は...俺何でかISに乗れました...」

東：「え?!嘘ツ!?!...ちよつといっくんIS装着してもらって良い?」

一夏：「はい。展開!!Pラファール!!」

一夏はPラファールを展開する。

東：「マジで... てか、ボロいね...」

東の言うとおり一夏のPラファールの装甲はボロボロだった。

一夏：「誘拐された時にIS乗りが襲つて来たんでサブマシンガンで応戦したんですよ。たまたま弾はA I S弾だったみたいで何とか撃破出来ました。」

東：「それでもよく生きてられたね... I Sの武装って当たったら即死レベルの威力の武器ばつかなのに...」

一夏：「ホント死ぬかと思いましたが... A I Sあったとしてももう生身でI Sと戦いたくないですね... とにかく用件は何で俺がこいつを動かせるかと修理を頼みたいんです。」

東：「乗れる原因か... そつちは時間がかかるけどやってみる。修理はこの装置で一時間で直せるよ!!」

一夏：「早すぎる!？」

東：「ついでに改修もしといてあげる。どんな風にしたい?」  
どんな改修にするかを一夏に聞く。

一夏：「多目的利用可能にしてください。それプラス出来れば機動力、あと、耐熱性も上げてください。」

東：「りょーかい。早速装置を起動して作業を開始するよ。ところでちよつと聞きたいことがあるんだけど...」

一夏：「なんですか?」

東：「特地つてド○クエみたいに魔法あるの?」

一夏：「ありますよ?一応俺も使えますし、こんな感じにつと。」

一夏は光雷球を発動する。

東：「おおっ!?!す、すごい!!」

一夏：「まあ使える魔法はこれ以外は初級のやつしか使えないですけど。」

東：「それでも十分凄いや!!あとでちよつとデータ取らせて!!お願い!!」

東は一夏に抱き付く。

一夏：「ちよっ!!?」【バリバリバリバリッ!!】「ぎやあああああ!!!?」  
束：「あばばばばばっ!!?」

光雷球の制御に失敗し電撃をもらに喰らってしまふ。

伊丹：「ええ!?!ちよっ!!?一夏!?!束!?!」

二人：「死ーん…」

伊丹：「これ本格的にヤバイパターンじゃねえか!?!何かどつかの病弱セイバーみたいになってるじゃん!!」

結局束との再開もなんともしまらないものなってしまった。

(※二人はその後、レレイの回復魔法で何とか復活しました。)



## お買い物は計画的に

参考人招致と再開を果たした次の日、一夏達は莉沙の提案で買い物をする事になった。

伊丹：「とりあえず、各自行きたいところがあつたら班で行動してくれ。俺の班はちよつと俺の上司にあつてから行動開始するからな。」

一夏：「集合場所はキャットストリートのワイルドキャットついで喫茶店前で宜しくお願いします。」

伊丹：「んじゃ、集合時間まで解散!!」

伊丹の号令と同時に各班は行動を開始する。

side：伊丹班（伊丹、一夏、レレイ、東）

伊丹達は上司に会うため、ハチ公前公園にいた。

???:「お、こつちだ!!伊丹!!」

伊丹：「閣下!!」

東：「!?もしかしてあの時のおじさん!」

???:「うん?ってお前あの時の嬢ちゃんか!!大きくなつたじゃねえか!」

伊丹に閣下と呼ばれた男： 嘉納太郎防衛大臣は東を見て驚いた。

???:「嘉納：「懐かしいな。お前らと初めて会つた日に教えて貰つた漫画はその日うちに出てる物は全部読んじまつた。」」

伊丹：「俺も閣下に教えて貰つた漫画のシーンは忘れようとしても忘れられない物になりました。」

東：「それもだけど、しばらくたつて私が発表したISを認めてくれた数少ない人だつた。正直あの時おじさんがいなかったら、ISを作るのをやめてたかも知れなかつた。」

嘉納：「パワードスーツはやっぱロマンが無くちやいけねえ。俺はガキのころ宇宙に行つてみたいと思つていたから、お前の夢を応援しなくなつた。お前、まだあの夢を諦めてないんだろう?」

東：「諦めるわけないよ。」

嘉納：「ならよし!!俺が生きてるうちにその夢を叶えてくれよ!!」

束：「わかってる!!」

まさかの再会に三人は一夏達のことを忘れて話し込んでいた。

レイ：「……これはどうすれば良いの?」

一夏：「取り敢えずそつとしよう。何か感動の再会みたいだし……」

数分後……

嘉納：「……スマン君達のことを忘れて話し込んでしまった……」

一夏：「いえいえ……気にしないで下さい。」

嘉納：「しかし……本当に良いのか?この機会を逃したら当分こっちは戻れないぞ?」

一夏：「いいんですよ。俺は特地が好きですし、故郷の日本と戦争になるのは嫌なんです。」

嘉納：「そうか……なら、これから宜しく頼むな。」

一夏：「はい!!」

嘉納：「伊丹!!こいつと特地の客人をしつかり護衛しろ!!」

伊丹：「了解!!」

数分後……

伊丹：「んじゃ、そろそろ買い物に行くか。」

レイ：「伊丹、私は本が沢山あるところに行きたい。」

伊丹：「そうか。よし、この辺にデカイ本屋があるからそこに行く。」

一夏：「了解です。俺もラノベの続き出てる奴を買いたいと思ってたんですよ。」

本屋へ移動中……

レイ：「本が沢山……これ全部買えるの?」

一夏：「ああ。特地じゃ本は高価だけど、こつちじゃ難しい本や入手困難の物以外なら基本的に安いからな。」

レイと一夏は自分が欲しい本を買い、他のメンバー達と合流するためキャットストリートに向かう。

その道中で一夏は特地に行く前に良く着ていた服のメーカーJP

オブザモンキーの服屋で新しい服を購入する。

その後伊丹達はワイルドキャットの周辺で待っていた他のメン  
バーと合流する。

伊丹：「よし、みんな揃ったな。」

一夏：「そんじゃ、入りますか。」

一夏は扉を開けてワイルドキャットの店内に入る。

???：「いらつしゃい… って夏坊じゃねえか!? 久しぶりだな!!」

一夏：「久しぶりにここ来てそうそう夏坊はやめて下さいよ羽伯さ  
ん。」

ワイルドキャット店長の羽伯は久しぶりに来たお得意様である一  
夏が来たことにとても喜んでいた。

羽伯：「テレビで見ただぞ。 お前おもいつきり女尊派にダメージ与え  
たな!! とにかく座れよ、注文は何にする?」

一夏：「取り敢えず特製ブレンド人数分お願いします。 あと、サイド  
で甘いものを適当にお願いします。」

羽伯：「あいよ!! ちよつと待つてな!!」

羽伯はコーヒーを入れる作業を開始する。

伊丹：「ここ、いい場所だな。 けど客、何か少くないか…?」

羽伯の店、ワイルドキャットの広い店内には一夏達以外の客は数人  
しかいなかった。

一夏：「ここは基本的にゆっくりコーヒーを味わうことを優先した  
店なんですよ。 ここのコーヒーとサイドメニューは結構人気なん  
です。」

栗林：「へえーそうなんだ。」

羽伯：「ブレンド人数分お待ちどう!! サイドメニューはクレープ  
セットとパンケーキだ!! 今日俺のおごりだ!!」

一夏：「いいんですか?」

羽伯：「ああ、お前のことだ、また特地に戻るつもりなんだろう?  
だったら暫くはこっち来れないだろ? それに特地の人達にうちの  
コーヒーを気に入ってもらえたらありがたいからな。」

一夏：「わかりました。 じゃあ遠慮なくいただきます。」

一夏達は羽狗特製ブレンドを飲み始める。

一夏：「やっぱここのコーヒーはうまい…。」

レイ：「初めて飲むけどこの苦味が良い。」

羽狗：「お、お嬢ちゃん良いセンスだな。今回はちよつと濃いめに入れたんだ。他の特地从来たお客さんはどうだった？」

テユカ：「私は結構好きかな？このぱんけーき？と一緒に食べたら結構良い感じだと思う。」

羽狗：「そうかそうか!!そいつはよかった!!」

コーヒーを飲んでしばらく休憩をしたあと、一夏達は当初の宿泊予定の温泉旅館に向かうため、店から出ようとしたが…

羽狗：「おっと、夏坊、あと、レイだったかな？二人はちよつと残つてくれ。」

一夏：「?どうしたんですか?」

羽狗：「お前達って…付き合ってるのか?」

一夏：「けっこうストレートに聞きますね羽狗さん…まあ付き合ってるどころか婚約してますよ?」

羽狗：「ブツ!」

羽狗はたまたま飲んでた水を吹き出す。

羽狗：「オメエのほうがストレートだろうが!!…とにかく、お前達を止めたのはこれを渡そうとしたんだよ。」

羽狗は二人に透明のバッチを渡す。

レイ：「なに、これ?」

羽狗：「このバッチはお互いの意思が最高に通じ合うと絵柄が現れるっていわれてる代物でな。何か二人は仲良さそうだから渡したんだが…これは思ったより早く絵柄が出そうだな…」

レイ：「だと嬉しい。」

羽狗：「しかし、これだけだとダメだな。めでたい話を聞いちゃったしな…うん?夏坊お前腰に何を着けてんだ?」

一夏：「収納装置です。結構中にいろいろな物を入れられるんですよ。」

羽狗：「大きさも大きすぎず、小さすぎずか…よし、ちよつとそれ

貸してくれ。」

一夏：「？はい。」

羽狛は収納装置を持って店の奥に向かう。  
数分後…

羽狛：「待たせたな!!」

羽狛は布に包まれた何かと少し大きめの箱を持って戻って来た。

羽狛：「まず夏坊は収納装置に俺が考えた絵を書いた。ホントは別のところに書こうとしてた壁グラの絵をこつちに書いた。今回書いた絵で伝えようとしたのは「また会おう!!」だ。」

一夏：「また会おう?」

羽狛：「ああ、人はいつかまた会えると思う奴が多いが、実際は逆で会えなくなることが多い…これは悲しいことだ…」

一夏：「そうですね…」

羽狛：「だけどな、会えなくなることは別に悪いことじゃない。寂しくなることもあるだろうがそれはそれまでの人生を友人や家族、恋人と一緒に全力で楽しんだことの証明だ。」

一夏：「確かに箒や鈴、そしてレイと会わなかったら多分今までの人生を全力で楽しむことは出来なかったと思う。」

羽狛：「だから人は再会を、たった一度だけでも会いたいと思うことがあるはずだ。俺もまたお前らと会いたい。だからまた会えることを祈ってこの絵を収納装置に描かして貰った。」

一夏：「成る程…絵を見るのが楽しみになってきましたよ。」

羽狛：「おう、絶対気に入ると思うぜ。と次は嬢ちゃんだな。嬢ちゃんにはコーヒー入門セットをプレゼントだ!!」

羽狛：「うちのブレンドコーヒーをドリップ式にしたものが入ってる。その他にも本格的なコーヒーを入れるための道具とコーヒー豆が多めに入ってる。道具のサイズはちよつと小さいけどその分持ち運びや片付けがしやすくなってるぜ。」

レイ：「ありがとう。」

羽狛：「おう!!ところで、嬢ちゃん。お前は誰か話すことは得意か?」

レレイ：「あまり得意ではない…。」

羽狛：「そうか。ならこれからは誰かと会話することを多くしてみな!!きつと嬢ちゃんが知らない世界を知ることが出来るぜ!!」

レレイ：「?..どういうこと?」

羽狛：「人が感じる考え方や価値観は人それぞれだ。けどな、自分の価値観や考え方だけで人はいきられるか?それは無理なんだ。」

羽狛：「だからな、別の人の考えを聞いて自分を見つめ直したり、自分の考えを教えたりして自分の世界を少しずつ大きくしていかなえと何処かでつまずく。」

羽狛：「だから、そうならないように人と話していけ!!そうすれば、きつと素晴らしき世界を見ることが出来る!!」

レレイ：「わかった... やってみる。」

羽狛：「おう!!と、そろそろ解放しないとまずいな。じゃあな、お前ら!!これからの人生を全力で楽しめよ!!」

一夏：「はい!!また時間あったらまたコーヒーを飲みに行くんですけどきは宜しくです。」

一夏達は店から出ていき、伊丹達と合流した。

そして一同は当初の宿泊予定の温泉旅館に向かう…

side：羽狛

まさかあいつに婚約者が出来るとはな…

けど、あいつと嬢ちゃんが話してるところを見たが本当に楽しそうだった。

はじめて会った時のあいつは何処か迷ってる感じがして心配だったが今のあいつならもう大丈夫だ。

出来ればもう迷ってる顔は見たくなかったからな…

嬢ちゃんには感謝だ。もしこっちに來ることがあったら何かサービスしねえとな。

温泉はマナーを守って入りましょう

ワイルドキャットを出た一同は日本政府が用意した車で温泉旅館に向かっていた。

伊丹：「ここで次の朝まで休みます。中には温泉があるのでゆつくり温泉に浸かって疲れをとって明日に備えましょう。」

千冬：「良いのか？ 私達までここを使つて？」

伊丹：「閣下が良いつて許可を出してくれた。急に特地の大使が来たのにも関わらず一晩部屋を貸してくれたからな。」

千冬：「それなら良いんだが・・・」

一同は宿に入り、部屋に荷物を置き温泉に入るための用意をする。

かぼーん♪

伊丹：「いい湯だなあー」

富田：「そうですなえー」

二人は湯船に浸かっていた。が、

富田：「俺はノーマルなんですっ!!」

伊丹：「わかつてるよっ!!」

なぜか二人の距離が近く、あわてて富田が伊丹から離れようとする。

(※二人ともノーマルです)

一夏：「うるせええ!!」

外で体を洗っていた一夏はシャワーの先端を外し温度を冷水に変更して二人に向けて発射する。

富田：「うわっ!?!」

伊丹：「ちよっ!?!一夏!!冷たいっ!!」

(※シャワーの水を他人にかけてはいけません)

ところ変わって・・・

女湯

かほーん♪

女性陣は温泉に浸かっていわゆるガールズトークをしていた。

千冬：「レレイといったな？お前は一夏と何処まで行った？」

レレイ：「何処までとは？」

箒：「き、きまつてるだろ!!」

鈴：「いいい、一夏とつ、つつ付き合ってるんでしょ!!」

レレイ：「付き合ってるどころか婚約してる。」

レレイ以外全員：「なにいい!!」

思わぬ発言を聞き、驚愕する一夏Loveの少女と非モテの女性達

(まあ莉沙は一時期伊丹と結婚していたため非モテとは言わないだろうが…)

箒：「こ、こんやくだど?!まだ勝ち目があると思っただが…」

鈴：「これじゃもう手遅れじゃない!!」

レレイ：「ちなみに告白は一夏からして、特地の婚姻の儀式はもうしてる。」

栗林：「儀式？やっぱ特地ってそんなのあるんだ？」

ロウリイ：「ねえレレイ？それってもしかして…」

テユカ：「やっぱりあれのこと？」

莉沙：「あれ？どんな儀式なの？」

レレイ：「三日夜の儀式をすること。」

千冬：「三日夜の儀式？」

テユカ：「男女二人が同じ寝屋で3日過ごすの。そうすると内縁関係が認められて結婚しました。ってことになるの。」

鈴：「な、なによそれええええ!!?!」

箒：「な、なんだとおおおお!!?!」

女湯に二人の悲鳴が響いた。

(※他のお客に迷惑になるので温泉ではお静かに…)  
(※まあ今回は貸しきりのため他の客はいないが…)

再び視点を戻して…



男湯

かぼーん♪

富田：「何か女湯の方が騒がしいですね。」

伊丹：「何かあったのか？」

一夏：「さあ……？」 ↑原因

先程の水発射で二人は落ち着き、一夏も湯船に浸かっていた。

伊丹：「そういや、レレイとはどうなんだ一夏？」

一夏：「言ってますでしたっけ？俺、レレイと婚姻の儀式してますよ。」

伊丹：「婚姻の儀式？ってちよつと待て!!お前まだ未成年だろうが!!何で婚姻してるんだよ!?!」

一夏：「落ち着いてください。婚姻の儀式はしましたけど、結婚するのは俺が18になるまで待って貰ってます。」

伊丹：「な、成る程、すまん……」

一夏：「まあいきなりこのこと言ったらびっくりしますよね……それはおいといて、富田さん。」

富田：「?どうしたんだ？」

一夏：「多分伊丹さんの部隊で一番最初に特地の婚姻の儀式、三日夜の儀式をやりそうだから先に教えておこうと思ひましてね。」

富田：「!?な、なんで……？」

一夏：「いや、富田さんってボーゼスさんのこと好きでしょ?」

富田：「どうしてそれを!?!」

一夏：「昨日の移動中ボーゼスさんのことずっと見てたでしょ?そんとき顔真っ赤でしたよ。わかる人がみれば確実にわかる位に。」

富田：「………そこまで?」

一夏：「そこまで。」

伊丹：「確かに顔だいぶ赤くなってたな。」

一夏：「ボーゼスさんも富田さんのこと意識してるっぽいし……」

伊丹：「見るとスツゲー面白いんだよなあ……」

一夏：「てか、もしできたらすけどデートでもすれば良いじゃないですか？多分喜びますよ？」

富田：「そ、そうか・・・」

一夏：「とりあえず三日夜の儀式について説明します。やることは簡単。男女二人が三日間同じ寝屋で過ごすっていうのが三日夜の儀式です。これが終わると二人は内縁関係が認められたことになるんです。」

富田：「!?まだ恋人でもないのにそんな事出来ないぞ!?」

一夏：「だからやるかもって最初に言ったじゃないですか・・・」  
その後話題がなくなったため三人は温泉から出ることにした。

side：客室

伊丹：「ああ!!働きたくねえよお!!もっと休みてえよお!!」

富田：「そうはいかんでしょ・・・」

一夏：「てか、小さい子供ですか・・・」

一夏が呆れていた時だった

ドンドンッ

襖が力強く叩かれた。

三人：「!?」

伊丹：「お前ら!!」

富田：「はい!!」

一夏：「・・・何か嫌な予感・・・」

バンッ!!

三人：「!!」

襖が勢い良く開き、出てきたものは・・・

栗林：「その男共お!!ちよつと顔出せやコラアアア!!」

ロウリイ：「出せやコラアアア!!」

酔っ払った非モテ女達だった。

栗林：「だアアれええが非モテだオラアアアッ!!」

伊丹：「いいっ!?俺なんも言っつてな・・・」

富田：「ちよつ!?その関節は曲がらな・・・」

一夏：「に、にげ…」

鈴：「逃げられるとおおお!!!」↑酔ってる

箒：「思うな一夏アアア!!!」↑酔ってる

一夏：「未成年が酒飲むな!!!」↑お前ら!!やめ…」

三人：「ギイヤアアアアアアアアア!!!」

静かな筈の温泉宿に三人の男の断末魔の叫びが響いた。

(※お酒は二十歳になってから…)

## 刺客から逃げろ

悲劇（酔っ払い強襲）から数時間後…

伊丹：「いてて酷い目にあつた…」↑ボロボロ

富田：「てか、何で栗林は仕事なのに酒飲んでんだよ…」↑ボロボロ

一夏：「箒と鈴は未成年なのに酒飲むか普通…」↑ボロボロ

（※箒と鈴は16歳なので酒を飲むではいけない。お酒は二十歳から）

一夏：「千冬姉は大丈夫か？酒結構飲むから多分酔っぱらうことはないと思うけど…」

伊丹：「確かにあいつは酒強いから大丈夫だろうが…」

伊丹は千冬と酒飲んだことが結構あつたため彼女が酒に強いことを知っていた。

富田：「これ以上は嫌ですよ…」

富田の視線の先には暴れまくって満足したのか非モテの酔っ払いが気持ち良さそうに眠っていた。

栗林：「だあれが非モテだああ…ムニヤ…」

伊丹：「…とりあえずこいつらはほつとこう…」

一夏：「ですね…」  
ピリピリっ

伊丹：「うん？閣下から？もしもし…」

嘉納：「伊丹!!急いでその宿から脱出しろ!!」

伊丹：「!!なにがあつたんですか!?!」

嘉納：「アメリカの特殊任務班がお前達がいる宿に向かつてる!!急いで大使達を連れて逃げろ!!」

伊丹：「了解!!お前ら!!急いで準備しろ!!」

二人：「了解!!」

三人は宿から脱出するためメンバーを起こし、すぐに宿を出ようとするが…

栗林：「ZZZ…」

ロウリイ：「ZZZ..」

一夏：「さっさと起きろ!!この酔っ払い共!!」

二人：「あばばばばっ!!」

一夏はなかなか起きない酔っ払いに雷を落とす。

(※箒と鈴は酔いが覚めたのかすぐに起こせた。)

脱出する準備が終わり、脱出しようとする。

ロウリイ：「!?伏せなさい!!」

ロウリイがそういつた次の瞬間だった。

近くの窓から無数の銃弾がメンバーを襲った。

伊丹：「ウオッ!」

一夏：「おいおい!!特地参考人を殺す気か!?連れて行くなら非殺傷

弾使うだろ普通!!」

一夏は収納装置から幾つかの銃を取り出した。

一夏：「伊丹さん!!富田さん!!栗林さん!!これ使ってください!!」

栗林：「ナイス一夏君!!」

栗林は一夏から受け取ったMP5Kで特殊任務班に攻撃を開始する。

それと同時にロウリイが工作兵に攻撃するため突撃する。

ロウリイが突撃してきたことに気づいた工作兵は持っていた銃で攻撃しようとするが...

ロウリイ：「ウフフ!!ハハハハハハ!!」

兵：「ガッ...」

容赦なくハルバードを叩きつけられ絶命する。

兵：「ひ、怯むな!!撃て撃て!!」

一夏：「させるかっ!!」

ズガンッ!!ズガンッ!!

工作兵：「ぐあっ!!」

一夏はAISで兵を射殺。

それと同時に伊丹、富田が銃で工作兵を攻撃しながら参考人と千冬達を安全な場所まで避難させる。

伊丹：「くそっ!!数が多すぎる...」

富田：「このままじゃ不味いですよ!!どうします!？」

一夏：「こんな所じゃグレネードとかの爆発するやつは使えねえし...」

一夏がどうするか悩んでいた時だった。

兵：「ぐわあああ!!」

兵：「く、来るな!!ぐあっ!!」

伊丹：「おいおいマジかよ...」

伊丹が見たもの...それはロウリイが工作兵を容赦なくハルバードで殺していた所だった。

ロウリイが殺したのが最後の工作兵だったのか攻撃が止み、周りは静かになった。

一夏：「あれがエムロイの使徒か...容赦ねえな...」

工作兵強襲から約30分

伊丹達一行は工作兵の装備と車を拝借し、旅館があつた山から脱出していた。

伊丹：「なんとか脱出できたな...」

一夏：「てか、あれ本当に特殊任務班なんですかね?」

栗林：「確かに特殊任務班って基本的に要人確保とか専門なのに派手に動きすぎよね。」

伊丹：「とにかくどっかのICに入ろう。そこで休憩してから門に戻ろう。」

side:IC

ICで伊丹達一行は明日に備えて休息を取っていた。

一夏：「まさか車で寝泊まりすることになるとは思いませんでしたよ...」

伊丹：「言うな...俺だって初めての高級温泉宿でゆっくり休めると思ってたんだからよ...」

富田：「オマケに男女比が凄いいことになってるからゆっくり寝れる

自信がないですよ..」

一夏：「とりあえず富田さんはボーゼスさんの隣で寝てください。」

伊丹：「お!!それはいいな!!」

富田：「だから無理だつて!!隊長も賛成しないでください!!」

この頃弄られることが多くなった富田であった。

ちなみにボーゼスも莉沙やピニヤに弄られることが多くなったとか。

翌日：..

side：門付近

千冬：「何でこうなった?」

莉沙：「あ、あははっ、まさかこんなに集まるとは思わなかったよ..」

鈴：「莉沙さんが言つてた大きなお友達つてすごいですね..」

門周辺には大量の人がいた。

理由は莉沙がカモフラージュのためにネットの掲示板に今日門で特参考人が鎮魂の祈りをするために来るとい情報アップしたためだった。

この情報で民間人を大量に呼び特参考人を見つけ難くして門まで護衛するという作戦を考え、実際にこの作戦を使う事に成った。

だが、作戦は半分成功して半分失敗した。

理由はとても簡単。

人が予想以上に集まり、逆に身動きがしにくい状態になってしまったのである。

伊丹：「くそつどうする..このまま外に出れば見つかったまう..」

ロウリイ：「ねえそんな事気にせずにこのまま出ちゃえばいいじゃない。」

ロウリイ以外全員：「は?」

ロウリイは何の躊躇もなく車の外に出た。

しかも車から出て伸びまでしていた。

伊丹：「ちよ!？」

伊丹はロウリイを車の中に戻そうとしたが…

民間人：「うん？お、おい!!あれロウリイ様じゃないか!？」

民間人：「本物だ!!ウオオオオオ!!」

民間人：「ロウリイ様アアア!!」

鈴：「もう手遅れみたい…」

一夏：「伊丹さん…普通に歩いた方がいいと思いますよこれ…」

伊丹：「だな…すまん莉沙、悪いけどこの車どっかに置いてくれ。」

莉沙：「え？ちよ!？私ペーパードライバーなんですけど!？」

千冬：「私が変わる。伊丹、一夏、無茶はするなよ。それとレレイ、次に会ったらゆつくり話そう。一夏の昔の話を教えてやる。」

伊丹：「分かってるって。」

一夏：「りよーかい。」

レレイ：「わかった。」

箒：「ま、待て一夏!!レレイ!!これ持っていけ!!」

箒は一夏に小太刀2本、レレイにお守りを渡す。

一夏：「小太刀?」

箒：「護身用だ!!昨日実家から持ってきた!!レレイのは実家の神社のお守りだ!!」

一夏：「お、おう…」

レレイ：「あ、ありがとう。」

ピピツ!!

東：「お、丁度いっくんのISの改造が終わったみたいだね!!」

一夏：「なんとか帰るまでに間に合ったか…」

東：「急にメンテ装置が壊れたから思ったより時間がかかったからね…とりあえずいっくんの要望通りの設定にしておいたよ。試作品の武器を使えるようにもしたから良かったら使ってみてね!!」

「あとは、何かあったときに使うかも知れないから工作道具とか個人的な趣味で作った物があるからそれもあげる。いっくんがもってる



やつと似た装置に入れといたからね!!」

一夏：「分かりました。ありがとうございます。」

伊丹：「一夏!!そろそろ行かねえとヤバいぞ!!」

一夏：「は、はい!!千冬姉!!行ってくる!!」

千冬：「気をつけて行ってこい!!ヨウジ!!一夏を頼むぞ!!」

伊丹：「おう!!」

こうして伊丹達一行は、千冬達と別れ、ゲートのある方向に進んでいく。

ゲートに入る前に東京襲撃時の被害者に祈りをしたあとすぐに特地に戻った。

## 復活のPラファール

side:アルヌス自衛隊基地

一夏達が特地に戻って1週間が経とうとしていた。アルヌスに避難していた避難民はアルヌスに小さな町を作ることを考え行動を開始していた。

彼らは最初に町の中心に緊急時の拠点にもなる建物を作ろうとしていたが、ある問題が浮上した。

一夏:「木材が足りない?」

避難民:「そうだ、近くの森から採ってくる来ることも出来るが最近その森の近くに大量の翼竜がいるから手が出せないんだよ。」

伊丹:「それはキツイな...」

避難民:「他の所に行くことも考えたがそれだと帰るのに時間が掛かりすぎる。」

レイ:「だから自衛隊に協力を要請したい。」

伊丹:「わかった。とりあえず俺の部隊出せるか上に聞いてみるわ。」

一夏:「了解です。」

次の日...

伊丹:「許可出たから例の場所に行くぞ。急いで準備してくれ。」

一夏:「わかりました。みんな!!急いで準備してくれ!!」

side:車内

伊丹:「そーいや、束に修理してもらった機体っってもう動かしたのか?」

一夏:「一回だけ動かしました。武器も機体も予想より性能がいいみたいでした。俺がアードなら絶対こう言ってますよ。パーフェクトだウォォターってね。」

伊丹:「ははは!!そいつはいい!!懐かしいネタもいい!!」

一夏:「でも、ヤバイ時だけ使うようにしないと...なんかあったら束さんしか直せないし...」

レイ:「確かに緊急時の時に使ったほうが効果的だと思う。それ

に、ラフアール系の武器は銃系統の武器が多いから弾の消費が激しいと本に書いてあった。」

一夏：「つてお前、ISの本も買ったのか？」

レレイ：「新しい魔法のヒントになるかと思つて買った。」

一夏：「まあ、それは置いといてだ。こいつは通常のラフアールとは結構違うからその本の情報とは違うことばっかだからな・・・とにかく扱い方の参考にはなると思う。」

レレイ：「わかった。」

伊丹：「そろそろ例の森に着くぞ!!そろそろ用意してくれ!!」

side：森

伊丹：「ここが例の森か・・・やけに静かだな・・・」

一夏：「この森の一番奥に翼竜の巣があるみたいです。早く必要分の木を集めてきつさと帰った方が安全です。」

伊丹：「だな。急いで作業を始めてくれ。俺達の部隊も手伝えることはするからなんかあったら言ってくれ。」

一夏：「了解です。」

数時間後・・・

一夏：「作業が完了したみたいです。」

伊丹：「よし、引き上げる!!急いで用意しろ!!」

レレイ：「!!一夏あれ!!」

レレイが指した方向に視線を向けるとそこには大量の翼竜がこちらに向かっていている所だった

一夏：「おいおい・・・マジかよ・・・伊丹さん!!早くみんなを連れて引き上げてください!!翼竜の大群がこっちに向かっていています!!」

伊丹：「わかった!!アルヌスの人達を車で安全な場所まで送る!!木材は後で回収する!!一夏も早く車に!!」

一夏：「いや俺は残ります!!この距離だと10分もしなうちに追い付かれる!!ラフアールで奴らを足止めします!!ヤバくなったらすぐ逃げます!!」

伊丹：「わかった!!市民を安全な場所まで送ったらすぐに援護に戻る!!無理はするなよ!!」

一夏：「了解!!」

伊丹達を乗せた車は森の出口に向かう。

一夏：「さて… 復帰戦と行こうぜ!! Pラファール!!」

一夏はPラファールを展開する。

Pラファールの装備は修理及び改修前の中のPラファールと比べて大幅に増え、強化されていた。

しかしここで1つ問題が発生した。

装備が多過ぎて、粒子転換で装備が全部入らないということである。

そのため出撃する前に装備を戦況及び作戦に応じてしっかりと選ぶ必要があった。

使わない装備は束が作ったIS用収納装置に収納して拠点に置いてある。

今回の装備は防御重視のシールドー装備である。

両肩に剣と盾として使え上部に小型のガトリング砲が着いているシールドソードをマウントし、両腕部にシールドガトリング、両脚部に六連装多目的ミサイルランチャーを装備している。他にもハンドガンや、ショットガン、近接ブレード等も粒子転換で収納している。

今回の戦闘はこの装備で行う。

一夏：「最初はこいつでビビらせる!!」

一夏はシールドガトリングで翼竜を撃つ。

ガトリング砲から放たれた弾丸は容赦なく翼竜を撃ち落とすという。

一夏：「次はこいつってうおっ!」

いきなり翼竜が一夏に体当たりをしかけた。

大きな衝撃が一夏に襲う。

ISは無敵というイメージがあるが実際はそうでもない。

確かに通常の兵器や、生身の人間による攻撃は効かないが衝撃までは逃がせない。

そのためIS乗りは攻撃を受けないようにするのは勿論、訓練等で自分を鍛えなければならぬ。

もし、強い衝撃に耐えられないで気を失ってISが解除されたり、気絶している状態で攻撃を大量に受けては、シールドエネルギーが0になってしまう。

一夏：「にやる!!」

一夏はガトリングシールドを収納してシールドソードを両手に装備した。

この武器はその名の通り、盾として使え、剣として使える。

一夏はシールドソードで体当たりをしてきた翼竜の頭を狙い重い一撃を喰らわせる。

翼竜：「ギャア!？」

頭に強力な一撃を受け、翼竜は意識を失い墜落した。

一夏：「一生寝てる!!トカゲ野郎!!」

シールドソードに着いているガトリング砲を墜落した翼竜に向けて撃ったあと、再び翼竜の群れに攻撃を開始する。しかし、翼竜が多すぎる為か数が全く減らない。

一夏：「ならっ!!いつで!!」

一夏はシールドソードを肩に再装着し、大型のライフルを取り出す。

このライフルにはある特徴があった。

それは使用者の魔力をライフルのグリップから吸収し、そのエネルギーを攻撃に転用する事で強力な一撃を敵に与えるという特徴だ。

一夏：「魔力チャージ完了：： 魔力を雷属性に変更完了：： 照準よし!!雷光弾発射!!」

ズドオンツ!!

ライフルから雷光弾が発射される。

雷光弾は翼竜の群れに真っ直ぐ飛んでいき一番前にいた翼竜を貫通して次々と撃ち落としていく。

一夏：「試作型とはいえさすが東さん特製の銃だ。3分の1はこれで減ったぞ：： けど：： 結構魔力奪われるな：：」

雷光弾を発射したことによってかなりの量の魔力を消費してしまい、しばらくの間魔法を使うことが出来なくなった。

一夏：「一旦退くしかねえな。これ以上続けたらこっちがもたなくなる。」

一夏が一度後退しようとしたそのときだった。

伊丹：「一夏!!待たせたな!!」

一夏：「伊丹さん!!」

避難民を安全な場所でおろしてきた伊丹達が引き返してきた。

伊丹：「全隊攻撃準備!!目標、前方の翼竜の群れ!!よく狙えよ!!」

今だ!!撃てエ!!」

伊丹達は一夏を援護するため翼竜に攻撃を開始する。

レレイ：「一夏!!私も援護する。」

一夏：「了解!!一緒にあいつらを落とすぞ!!」

レレイ：「わかった!!」

そのときだった。

一夏の収納装置とレレイの体から光が溢れだした。

レレイ：「なにこれ!?!」

一夏：「レレイ!!お前の服の中から光が!!」

レレイ：「!?これって...?」

一夏：「羽拍さんから貰ったバッチから光が!!ってことは!!」

一夏は収納装置からバッチを取り出す。一夏のバッチも光を大量

に放出していた。

やがて光が収まり、透明だった絵柄は杖と銃が交差した物に変わっていた。

一夏：「なんかわからねえけど...」

レレイ：「力が湧き出てくる!!」

一夏：「挟み撃ちで一気に決めるぞ!!ライフル再展開!!」

レレイ：「わかった。これで決める...!!」

一夏+レレイ：「いつけええええ!!」

二人の攻撃は近くにいた翼竜を次々と撃ち落としていく。

伊丹：「一夏とレレイに続け!!撃って撃って撃ちまくれエエエ!!」

さらに伊丹達自衛隊の集中砲火が翼竜達に襲う。

そして数分後...

伊丹：「撃ち方止め!!これで全部だな。木材拾って撤収するぞ!!後でもう一回ここ来て翼竜の死体を持って帰るぞ!!」

自衛隊：「了解!!」

伊丹：「一夏とレレイは休んでろ。一夏、よく頑張ったな。」

一夏：「いえ、それより村の人は?」

伊丹：「ちゃんと安全な場所に下ろしてきたから大丈夫だ。」

一夏：「そうですか...」

レレイ：「伊丹の言う通りにした方がいい...これ以上は動けない...」

一夏：「俺もだ...力がはいんねえ...」

ボテツ×2

一夏とレレイは倒れてしまった。

伊丹：「お、おい!!しつかりしろ!!」

一夏：「ZZZZZ...」

レレイ：「ZZZZZ...」

伊丹：「寝てる...おい、誰か手貸してくれ。こいつら車に乗せるぞ。」

一夏達と木材を回収したあと車はアルヌスに向かって走り出す。

この日集めた木材はのちにアルヌスの拠点の建物に生まれ変わり、住民達を支える大切な物になった。

information!!

羽豹から貰ったバッチがシンクロバッチレベル1に進化した!!(効果

果：①魔力回復②攻撃範囲内の敵に一夏が雷光弾を連続発射、レレイが威力が低い風の砲弾を大量発射。③一定時間攻撃力上昇)

Pラファール(シールドー装備)を使用可能になった!!

やっぱりお風呂は疲れをとる最高の手段だと思う

side：アルヌス自衛隊基地

突然だが仮設風呂が壊れてしまった。

一夏：「いきなりにも程があるだろ!!」

レイ：「一夏? 誰に言ってるの?」

一夏：「いや、誰にも言っていないけど!!さすがこれは酷いぞ!! 何で俺が入った瞬間に浴槽が真つ二つに割れんだよ!」

伊丹：「翼竜の大群と戦って疲れてるから風呂入ろうとしたらこの状況になるって... どんだけだよ...」

因みにどういうわけか女風呂も一夏が入ったのと同時に壊れてしまった。

栗林：「ホントにどうなってんのよこれ...」

倉田：「隊長、予備の風呂も壊れてました!!」

まさかの予備の風呂の故障の報告を受け、その場にいた全員は固まってしまった。

伊丹：「... こういう時ってなんて言えばいいんだっけ...?」

一夏：「... あれしかないでしょう...」

栗林：「だよね...」

倉田：「だよな...」

自衛隊十一夏：「なんて日だ!!」

全くその通りである...」

(※ショックから回復するまでしばらくお待ち下さい...)

数分後...

伊丹：「どうする? 一応自衛隊の宿舎の方にシャワーならあるけど?」

一夏：「あとで入らせてもらいます。ちよつとやりたいことがあるんで。」

伊丹：「了解だ。そんなときになったら呼んでくれ。」

side：一夏&レイの部屋

一夏：「東さんから貰った収納装置に色々入ってるのは聞いたけど



まだちやんと中身を見てなかったんだよな… まともなやつがあればいいけど…」

一夏が言っていたやりたいこと、それは束から貰った収納装置の中身をチエツクする事である。

一夏：「しかし… 本当にいろんなものが入ってんな… 此方じや確実に使えないものばっかだけど… つとこれは使える… これは… 微妙だな…」

使える物と使えない物を分けていく。

レレイ：「本当に色々な物が入っている。」

一夏：「さすがにこれは入れすぎだよ束さん… おっ!? こいつは… レレイ、悪いけど伊丹さんにシャワーはいいって言っといてくれ。」

レレイ：「? どうして?」

一夏：「シャワーよりずっと良いものを見つけたらだよ!!」  
数分後…

レレイ：「言っておいたけど何をするの?」

伊丹：「水浴びでもするのか?」

シャワーよりも良いものが何か気になったのか何人かのメンバーが一夏達の部屋に来ていた。

一夏：「伊丹さん、それは絶対嫌ですよ。全然疲れがとれないですし。これですよ、これ。」

伊丹：「? ドラム缶? ああ、なるほどドラム缶風呂か!!」

一夏：「大当り!! まだ何個かあるんで良かったら持って行って下さい。」

伊丹：「わかった。」

という訳で…

伊丹：「第一回特地初ドラム缶風呂づくり!!」  
パチパチパチパチ…

伊丹：「何かテンション低い拍手だな… まあいい。とにかく道具は用意したから各自作業を進めていってくれ。」

レレイ：「一夏、ドラム缶風呂ってなに?」

一夏：「キャンプとかで入る風呂の1つって言っているのかな? こ

いつの蓋を取って中身を全部出して綺麗にしたものを風呂にするんだよ。」

一夏はハンマーとタガネ（※大きなマイナスドライバーの様なもの）を使ってドラム缶の蓋の周りに穴を開けていく。

この作業は一見楽に見えるが実はかなりキツイ。

その理由は……

一夏：「……」

ガンガンガン!!

一夏：「……」

ガン!!

一夏：「取れねえ……」

そう。蓋の周りをほぼ一周、もしくは完全に一周しないと取れないことである。

一夏：「仕方ない、チート使うか。Pラファール部分展開、近接ブレイド展開。」

一夏は近接ブレイドでドラム缶の蓋を切り取った。

（※こんなことにISを使わないように……）

伊丹：「あ、ズリィ!!」

一夏：次はサンダー（※物を切るための工具。刃を交換することで硬い物を削ることも出来る。）で蓋の周りを削って中をしつかり洗わねえと。」

（※注：サンダーを使用する場合は火花が激しく飛び散るため防護メガネと防護手袋を必ず使用してください。）

―数時間後―

一夏達は完成したドラム缶風呂に水とすのこを入れ、ブロックでドラム缶を高いところで固定し、地面に穴を開けてその中に薪をいれて火をつける。

一夏：「あとはお湯になるまで薪を入れながら待つって感じだな。」

レレイ：「ドラム缶風呂って結構時間がかかるものなの？」

一夏：「場合によるな。でもまあ、苦労した分だけ楽しみが増えるって言うしもうちよいの辛抱だな。」

そして数分後・・・

一夏：「よし!!お湯になった!!熱さは・・・いい感じだな・・・そうだ

!!レレイ先にお前が入れよ!!」

レレイ：「いいの?」

一夏：「ああ、お前も魔力を結構消費したから疲れてるだろ?こういう時は女が先に入るべきだ。」

という訳で・・・

レレイ：「あつ・・・けど気持ちいい・・・」

一夏：「ははは、そうだろう!!やっぱ風呂はこうじゃないとな!!」

その後、一夏もドラム缶風呂に入り長い1日の疲れを取った。

因みにこれは余談だが今回一夏が作ったドラム缶風呂は後に一夏とレレイの家の隣に出来た小さな小屋に置かれ、いつでも使えるようになったとか・・・

(※ドラム缶風呂をするときは必ず消火用の水を用意してから入るよ  
うにし、地域やキャンプ場などのルールを守ってお楽しみください。)

一夏のわりと忙しい特地生活／どうやらロウリイ様は激おこのようです

建物の材木を採取した日から4ヶ月が経過した。

自衛隊の協力も会ってアルヌスは少しずつだが建物が出来ていき、徐々に発展していった。

ところが発展していくにつれある問題が浮上した。

これは町が発展していてもしていなくとも重要な問題である。

それは…

特地人：「○○○、○○○?」

自衛隊：「え、何て言ってるんだ?」

そう。それは言葉の問題である。

これは前々から問題にはなっていたが発展前のアルヌスはそこまですべて特地の人間が多くなかったのである程度は対応する事が出来ていた。

しかし現在は違う。大量に特地側の人間が増えたため、対応する人間がいらない場合によってはややこしい状況になってくるのである。

そこで自衛隊はあることをはじめることにした。それは…

一夏：「今、ボードと配布したプリントに書かれている文字と訳は特地の挨拶や物、動物の呼び方などをリスト化した物です。しかし、当たり前ですがこれだけでは特地での会話は出来ません。今自衛隊の方々が特地で活動するためにはまず言葉と文字を覚えなければなりません。」

自衛隊：「それはそうだけど特地の言葉で会話出来るようになることと文字を読み書き出来るようになるのはかなりの時間が掛かるんじゃない?」

一夏：「そうです。俺の場合は幸か不幸かカトー先生の試作の薬で話すことと聞くことは直ぐに出来るようになりましたが文字を読み書き出来るようになるまで2ヶ月はかかりました。しかし、これはレイ達が忙しくなるときに色々丁寧に教えてくれたためです。」

自衛隊：「その試薬はもうないのですか？それがあれば言葉の解決するでしょう？」

一夏：「残念ながら薬は俺が飲んだやつしかありませんでしたし、新しく作ろうにも材料と作り方の書かれた書はレイが燃やしてしまいました。」

自衛隊：「それじゃ仕方がないですね。でも何で燃やしたんですか？」

一夏：「後で調べたら試薬で使われた材料がものすごい危険な物が大量に使われていて、俺が飲まされた時はかなり危険な状態でした。ただでさえ体がボロボロの状態でしたし、それに加えて薬のせいで気を失う程の危険な成分が大量に体の中に入ってしまい、少しでも処置が遅れたら命は助からない状況になりました。」

自衛隊：「うわあ・・・」

一夏：「そんなものをまた作るわけにはいかないので二度と作らないようにとレイが作り方と材料が書かれた書を燃やして処分しました。」

一夏：「では今から特地の言葉を発音するので続いて発音してください。○○○○」

自衛隊：「○○○○」

数分後・・・

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピッ!!!

一夏：「時間が来たので今日はここまでにします。今回の講習で使ったものは次回の講習でもう一度使うので無くさないように気を付けて下さい。では号令お願いします。」

自衛隊：「起立!!有り難うございました!!」

その場にいる全員：「有り難うございました!!」

ここまで見れば何を始めたかわかっただろうか。

そう。答えは勉強会である。

一夏が講師として自衛隊に特地の言葉を教えて少しでも言葉による問題を無くそうとした。

一夏：「しかし、俺が先生の真似事をする事になるとは思わなかつ

た。」

特地で言葉の問題で何かあったときは一夏やレイが通訳していたが、もし二人が何らかの事情ですぐに対応出来ない場合が何回かあった。

そのため少しでも対応出来るように一夏達に講習を依頼し、特地の言葉を少しずつ覚えていこうとしたのである。

なおこの勉強会で使われた教材やプリントは後に貴重な特地の資料として扱われることになる。

### Next Story

どうやらロウリイ様は激おこのようです

これはアルヌスの町が今の規模になる前の話である。

(※今回はほとんどセリフだけです。)

ドゴオオオオンツ!!!

一夏：「うわああああ!?!」

伊丹：「足を止めるな!!走れ!!走れえええええ!!!」

ロウリイ：「にいいいがあああすうううううかああああ!!!」↑何故か

ブチギレ+大暴れ中

栗林：「隊長!!何があったらあんな風になるんですか!?!」

伊丹：「知るか!!」

レイ：「原因は不明。私達が追加の飲み物を買に行ってる間に

何かがあったと思われる。」

伊丹：「冷静に分析してる場合か!?!」

一夏：「てか、何があったらあんな風になるんだ!?!」

ロウリイ：「ウガアアアアア!!」

栗林：「なんかウガアアアアアって言い始めましたよ!?!」

富田：「とにかくはやく逃げ「キシヤアアアアツ!!!」グアアアアアツ

!?!」↑ロウリイが投げた木材が直撃

一夏：「富田さああああんつ!?!」

ロウリイ：「うふふふふ……次の獲物はだれかしらあ……」

伊丹：「まずい!!全員早く散れ!!固まったらすぐ狙われ(ドゴオオオオオンツ!!!) うおおっ!?!」

ロウリイ：「ふふ… ヨウジにキメタアアアア!!」

伊丹：「マジかよ?」

一夏：「今だあああつ!! 狙いが伊丹さんに向いている間にこの場から離れろおおおおつ!!」

伊丹：「一夏あああつ!! 俺を囮にするなああああ!!」

栗林：「隊長の逃げ足なら逃げきれますから!!… たぶん!!」

伊丹：「たぶんってなんだ!? たぶんって!?」【ドゴオオオオオンツ!!】  
うおおつ!」

ロウリイ：「なあにいをよそ見してるのかしらあ… 殺されたいならいいけどネエエエエエ!!」

伊丹：「う、うわあああああああ!!」

バキツ!! ドゴオン!! グシヤア!!

伊丹：「ギイイイイヤアアアア!!」(↑※断末魔の叫び)

一夏：「今のうちにここから(ドゴオオオオオンツ!!) うわあああつ!」

ロウリイ：「ニイイイイゲエエエルナアアアア!!」

一夏：「逃げないと死ぬから!!」

ロウリイ：「良いじゃない。別に。」

一夏：「よくねえよ!! ええい!! こうなら自棄だ!! 全員応戦用意!!  
こつちが殺られる前に殺るぞ!! 撃てえ!!」

ズダダダダンツ!!! ドゴオン!!! バリバリバリバツ!!!

(※しばらくお待ち下さい…)

ドサツ!! バタリツ!!

一夏：「チーン…」

レレイ：「チーン…」

栗林：「チーン…」

その他自衛隊：「チーン…」

【一夏達はぜんめつしてしまった!!】

(※数時間後になんとか復活)

因みにロウリイがブチギレした原因はある子供の発言が原因だと  
言うことが後に判明し、そのワードは禁止ワードとして自衛隊全員に

伝わった。

その禁止ワードとは一体何なのかは読者の想像にお任せする…



## 死神連合& a m p ; 炎龍編 特地雷人護衛任務

一夏と伊丹の部隊、そして特戦群はピニヤの別荘にいた。和平交渉を妨害するものから要人達を守ることと自衛隊の武装の一部を説明するためである。

一夏と伊丹は今回の任務の再説明をしようとしたのだが…

栗林：「び、微妙…」

富田：「……………ぶふっ……………」

倉田：「くくっ、くくくっ」

伊丹の服装を見た隊員達が笑っていた。

それを見た一夏は無言でサブマシンガン（※サプレッサー付き）を2丁拳銃で装備し……………

一夏：「……………」

タタタタタンツ!!!

無言で隊員達の足元を狙って連射した。

自衛隊：「どわああああっ?!」

一夏：「次笑ったらA I Sリボルバーで頭ぶち抜きますよ?」

一夏は収納装置からA I Sのリボルバータイプ（※しかもリボルバー系で最強と言われているS & a m p . WのM 5 0 0を対I S戦闘用に改造及び発砲時の反動が9 m m弾発射時の反動くらいに押さえられたトンデモ仕様の銃）を取り出すと隊員の一人に向けて忠告という名の脅しをかける。

（※ちなみに本来のM 5 0 0発砲時の反動はとても凄まじく、ちゃんと握って発砲してもその反動によってM 5 0 0を離してしまいM 5 0 0本体が自分の体に直撃することがあるとか。）

その場にいた全員：「すいませんでした!!」

伊丹：「あー今から任務の内容を再確認するぞ。今回の任務は今後の特地と日本の関係が決まる重要な任務だ!!失敗は絶対許されない!!絶対を抜くな!!」

一夏：「まもなく任務開始時間です!!」

伊丹：「来たぞ!!各員配置につけ!!」

自衛隊：「了解!!」

S a i d：一夏

一夏：「こちらルーラー、配置に着きました。」ザッ!!

伊丹：「こちらアベンジャー、了解。ルーラー、そっちの方で不審な人物が現れたらすぐ俺かセイバー達に連絡してくれ。」ザッ!!↑※無線の音

一夏：「こちらルーラー、了解。続いてルーラーから特戦群の皆さんへ、もし不審な人物が現れた時に可能ならその人物の写真を事前に渡した通信装置で送信してください。」ザッ!!

セイバー：「こちらセイバー、了解。可能な限り写真を送信できるようにする。話が変わるがルーラー、今回の作戦は君一人でそっちを監視してもらうことになったが、無茶な行動はしないように気をつけてくれ。もしそちらで対処出来ない時はすぐに無線で連絡するようにしてくれ。」ザッ!!

一夏：「こちらルーラー、了解」ザッ!!

今回一夏はPラファールを使って上空から不審人物が侵入及び接近しないように監視し、対応にあたるという仕事をしている。

そのため、装備を普段の戦闘用から偵察用装備に変更して今回の作戦に参加した。

一夏：「しかし、束さんがこんな装備を作るって珍しいよな...色々派手好きだからこういう装備は絶対作らないと思ってたんだけどな...」

一夏は装備の一つ、ガンカメラを使って周辺の様子を確認する。

このガンカメラは一夏のお気に入り装備の一つで、長距離撮影が出来るレンズで写真の他に映像を撮影したり、白い壁のようなものがあれば映画のような感じで映像を映すことが出来るという優れたものだ。

さらに普通の人間が持てる位の重量なのでISを装着していなくても装備できる。

そのため偵察時の写真、映像撮影時以外に、特地での生活の写真を

撮ったりするなどで何かと使用することが多い。

周辺の様子を確認していると少し離れたところから発砲音が聞こえてきた。

一夏：「自衛隊の銃の実演が始まったか… お客さんの様子はっと、おお、驚いてる驚いてる… って実演見てる場合じゃなかった。集中、集中… (ザザツ) うん？」

セイバー：「こちらセイバー、ルーラー、応答願う。」ザツ!!

一夏：「こちらルーラー、どうしました？」ザツ!!

セイバー：「会場に急速に接近する人物を確認、ルーラーにその人物の写真を送る、確認してくれ。」ザツ!!

一夏：「こちらルーラー、了解… さてどんな奴がうつってんだ… ってちよつと待て!!なんであんな大物が今回の講和交渉の会議会場にむかってんだよ!」ザツ!!

セイバー：「こちらセイバー、どうした?なんか不味いことでもあったか?」ザツ!!

一夏：「…急いで撤収の用意を!!あれは帝国の王子の一人です!!」ザツ!!

セイバー：「了解、すぐに撤収の用意を始める。」

一夏：「急いでください!!ここで講和交渉の要人達になにかあったらとんでもないことになる!!」

接近する帝国の王子は主戦派の派閥のため和平派の要人と鉢合わせすると下手をすると開戦の原因となってしまう。

それだけは絶対に避けなければならない。

数分後自衛隊は要人を安全な場所まで送り、なんとか切り抜けることが出来た。

一夏：「やれやれ… なんとか間に合ったか… 俺もアルヌスに戻  
(♪♪♪) うん?通信?これは東さんか…」

東から通信… その意味とは…?」

オマケ

前回のロウリイがブチギレした理由

実はロウリイが暴れる数分前にあるワードを耳にしてしまい手当たり次第で物を壊したりしていた。

そのワードとは

例

ロリババア

結婚式出来る確率0%

貧乳

チビ

ツルペタ

などと言った例の言葉を気にしている人が聞いたら確実には怒る。

なので上記の言葉を発する場合は注意すること。

## 対ドラゴン戦闘用装備と屑共と再会と

S i d e : 東京 : ワイルドキャット

カランコロロン♪

羽狛 : 「いらっしやい!! : : : って夏坊じゃねえか!! いつ戻ったんだ! ? 」

一夏 : 「さつき戻って来たばつかですよ。それにあと2日くらいでまた特地にもどりますし。注文いいですか? とりあえずブレンドとサンドイツチあとミネストローネください。」

羽狛 : 「あいよ!! 」

注文を受けた羽狛は調理スペースに入り調理を開始する。

一夏 : 「まさかあれから一年経たずに少しの間とはいえ日本に戻るとは思わなかったな。」

一夏がワイルドキャットにいる理由 : : : それは前回束から連絡が来た時にさかのぼる。

数日前

S i d e : 特地

一夏 : 「対炎竜用の装備ですか? 」

束 : 「そうだよー。前に渡した装備は急だったから試作品の中から使えるやつとか他の機体 : : : 例えばラファールの装備品とかの第二世代の装備ばつかでね。一応前に要望していた装備はあったんだけどそれで炎竜の攻撃に耐えられるかと攻撃が通じるかちよつと不安なんだよね : : : : : 」

束 : 「だから装甲と装備を新しいのに交換して機体を強化したいんだ。だから悪いんだけど一回日本に戻って来てほしいんだ。」

一夏 : 「わかりました。自衛隊の上の人に聞いていつ戻っていいか聞いたらこつちから連絡します。」

ということがあったのである。

再び s i d e : 東京 : ワイルドキャット

カランコロロン♪

東：「ヤッホー♪久しぶりだね、いつくん♪」

一夏：「東さん。遅いですよ。」

東：「ごめんね、ちよつと面倒な奴に追われてね。何とか対処してきたよ。」

一夏：「今度は何をやらかしたんですか？ちよつとやそつとじゃ驚かないですよ。」

東：「違反装備とか密造して売ろうとしてるやつらから今回の装備品のパーツやらを根こそぎ奪って始末したんだけどまさか生き残りがいるとは思わなくてね。ついさつきまで撃ち合ってたんだよ。」

一夏：「全然ちよつとじゃねえよ!!なんちゆうことしてんですかあんだ!!」

羽狛：「つていうかそんなことしてつけられたりとかしてないよな!?!厄介事はごめんだぞ!!」

東：「まあ始末って言っても足とか腕とかに鉛玉ぶちこんで黙らしたあとその国の警察に捨ててきたけどね。」

一夏：「鬼ですか!?!いや命奪わないからまだましな方だけど!!」

羽狛：「さつきも言ったけど厄介事はごめんだぞ!!もしなんかあったらその厄介事が片付くまで出禁にするぞ!!」

東：「わかってるよ。いつくんのお気に入りのお場所を潰したくないからね。いつくん、IS出して。改造と強化するから明日まで預かるから。」

一夏：「わかりました。お願いしますね東さん。」

東：「あ、そうそう。いつくんにこれを渡しておくね。」

東は服のポケットからカタログのような物をいくつか取り出す。

一夏：「これって?」

東：「新しい装備の一覧と勉強用の教材だよ。どっちも分かりやすいようにしといたから役にたつと思うよ。ちなみに勉強用の教材は1日30分でかなり勉強会出来ると思うよ!!」

一夏：「助かります。中2で学校の勉強止まってたから自衛隊の人に勉強を教えてもらってましたけどやっぱり忙しいからあまり時間がとれないからこれはありがたいです。」

束：「集合は夕方5時にここに集合で、それじゃまた明日ね。いっくん」

束がそう言つてワイルドキャットを出ようとしたときだった。

ズカガガガガガガガンツ!!!

いきなり銃弾の嵐が3人を襲う?!!

一夏：「どわああああああつ?!?!?!なんだなんだ!!!」

束：「まさかさっきのやつら!?!」

羽狛：「お、俺の店があああ!?!」

一夏：「言ってる場合ですか!?!早く隠れて羽狛さん!!」

?：「織斑一夏アアアアアアア!!でてきやがれえええ!!」

一夏：「!?俺え!?色々やらかしてる束さんじゃなくて!?!」

店の外を見てみると店の出入口をふさぐように大量に人がいた。

そして、狙いはどういうわけか一夏のようだ。

?：「よくも俺達のチームを潰してくれたなあ!!」

?：「お前のおかげで俺達は貴重な仲間達と金を失った!!」

?：「二年前のあの日のことを忘れたとは言わせねえぞ!!」

一夏：「二年前：。つてその服の死神の鎌のエンブレム：。そうか

ためえら死神連合か!?!」

羽狛：「死神連合?」

一夏：「俺が中学一年の頃から悪さをしてきた救い用のない奴らだ

よ!!けど俺が特地行く二ヶ月前に仲間と一緒にチームの大半を

ボコボコにして警察に引き渡して実質壊滅した筈だ!?!」

死神連合1：「ムシヨに入れたぐらいでどうにかなるかと思つたか

!?!」

死神連合2：「むしろムシヨに入って復讐したい同志との絆が強くな

なつたわ!!」

一夏：「最悪じゃねえか!?!」

死神連合3：「しかもムシヨの中にいた暴力団の幹部と仲良くなつ

て、そのツテで武器やら金やらを援助してくれるようになったわ!!」

死神連合1：「この銃も暴力団から貰ったんだよ!!こいつでお前を

ぶっ殺してやるぜ!?!」

ダンッ!!

死神連合の一人がハンドガンで一夏を撃つが一夏に当たらず後ろの壁に弾丸がめり込んだ。

一夏：「…………… おいお前ら、あの場所のルールを忘れたのか？今撃つたの実弾だよな……………」

死神連合2：「ハッ!!それがどうした!?俺達がそんなルールなんかに従うと思ってんのか!？」

死神連合3：「今の俺達にはナンも怖くねえ!!だからこんなこともできるんだよ!!」

一夏：「!!ま、まて!!」

ズカガガガガッ!!!

死神連合はたまたま店内にいた小さな女の子達に向けてマシンガンを発砲する。

女の子：「きゃああああああおあ!!」

一夏：「やめろ!!」

一夏のは慌てて女の子達を守ろうとした。

しかし…

女の子1：「い、いたい…」

女の子2：「し、しっかりして!!」

間に合わなかった。

幸いにも女の子に直撃はしなかったが弾丸がかすったのか腕にかなりの数の傷が出来ていた。

死神連合3「見たか!!この威力ならいくらお前でも「さ…え…」

ああ？」

一夏：「なんで関係無い奴らを巻き込む!?狙うなら俺だけを狙えよ!!」

死神連合1：「そんなもん知るか!!其処にいるのが悪い!!」

死神連合2：「むしろ俺達の強さの証明の材料に鳴れたんだ!!ありがたく思っほしいなあ!!」

一夏：「ふざけるなああああ!!!」

死神連合：「うおっ!？」



一夏：「そんなことのために… そんなことのために関係の無い女の子を撃つたのか!? ふざけるな!!」

一夏：「最後に聞いておく… お前らこれが最後のチャンスだ… 今すぐ女の子に謝って警察に自首す「ズガアン!!」!!」

死神連合：「するわけやねえだろう!!」

死神連合：「俺達以外にも兵隊はまだまだいるんだ!! これだけの人数ならお前一人ぐらい直ぐ殺せんだよ!!」

一夏：「オーケー、よおーくわかった!! 束さん!! その子達を早く店の中に!!」

束：「わかった!!」

一夏：「羽狛さん!! これに書いてある2つの電話番号に連絡してください!! この場所とcode:CPって言えばわかるはずですから!!」

羽狛：「よくわからんがこの電話番号にかければいいんだな!? やってみる!!」

一夏は装着していた収納装置から信号弾とサブマシンガン二挺を取り出し、腰にハンドガンと弾が入ったマガジンを大量に装備しいつでも撃てるようにする。さらにワイルドキャットの店の前に収納装置から取り出したバリケードを設置する。

バリケードを設置した後には信号弾を空に向けて撃つ。

ある場所のルールである場所以外で実弾を使用する場合は、信号弾を必ず撃って警告しなくてはならないというルールがあるからだ。

一夏：「お前達はあの場所のルールを破った!! しかも三つもだ!! お前達みたいな実弾を使ってくる奴には実弾で撃ち返していいことを忘れてないだろうな!!」

一夏：「俺はなかなか怒らない奴って言われてるけどこれはさすがにアウトだ!! 完全に切れたぜ!!」

一夏：「すこしは反省すると思った俺が馬鹿だった!! もうお前らは容赦はしねえ!! 神さんにお祈りする時間すら与えねえ!! 死にたい奴からかかってきやがれ!!!」

スガガガガガガガガンツ  
!!!!!!

死神連合：「ぎゃあああああつ!!」

一夏は容赦なく銃弾を叩き込み、死神連合を殺していく。

一夏の放った銃弾は敵を確実にあの世に送っていく。

だが死神連合も一夏を殺そうと手にした武器で一夏を攻撃する。

死神連合：「くそっ! たった一人でここまで戦えるのかあいつは!!  
ええい!! あれ持つてこい!!」

死神連合：「いくらお前でもこいつなら!! 死にやがれ」「一夏：「死ぬのはてめえのほうだ!!」ズガアン!!」ぐあっ!?!」

ズガガガガガガガガガガッ!! カチッ!! カチッ!!

一夏：「チッ!! 弾切れか!! ならっ!!」

一夏はA I Sハンドガンで応戦しながら収納装置からあるものを自分の目の前に展開する。

一夏の前から激しい光が現れ、光が無くなると其処には簡易式の鉄製バリケードが一夏を守るように現れた。

さらに一夏は撃ち尽くした装備を収納し新しい銃と弾、グレネード、非殺傷の睡眠ガスが入ったスモークグレネード等を取り出す。

死神連合：「なっ!?! き、きたねえぞ!! てめえ」「一夏：「お前らには言われたかねえよ!!」ポイ... カン!! コロコロ? ●↑グレネード!!」!?  
グ、グレネ「ドツカアアアアオンッ!!」どわああああああつ!!」

死神連合はこの時点でこの場にいるメンバーのうち半数近くが死亡、もしくは負傷によって身動きが出来なくなっていたが...

死神連合：「くそっ!! 増援だ!! 第一増援部隊を呼べ!!」

まさかの増援だ。

一夏：「くそっ!! 殺しても殺しても沸いてくる... 一体どこからあんなにも兵隊を用意したんだ!! いくらなんでヤクザ関係でもここまですれ集められないぞ普通!! せめてあと一人一緒に戦ってくれる奴がいれば...!!」

???：「なら、その一人に立候補させてもらいますよ!! 一夏さん!!」

ズカガガガガガッ!!!

死神連合：「ぐあああああ!!」

死神連合：「え、援軍が!? 一体だれが!! って嘘お!？」

死神連合の一人が見たものはバイクに乗りながらアサルトライフルをぶっ飛ばす赤髪の少女だった!!

少女は一夏のところまで行くと持っていたアサルトライフルを一夏に渡した。

???：「相変わらず無茶をする人ですね。」

一夏：「無茶もしたくなるさ、俺が無茶をするときは大体こいつらみたいな集団に囲まれたり実力差が離れすぎるときとか下手したら命を落とす時ばかりだからな。それよりこの銃はお前が使え。元々俺の愛銃とはいえお前に預けてからずっと使ってたみたいだしな。てか、お前なんでバイク運転しながらそれ撃てんの? あとお前、リボルバーはどうした? お前の二つ名が泣くぞ?。」

???：「壊れちゃったんですよ。他の銃はともかく、リボルバーとハンドガンは一夏さんが改造してくれたやつじゃないと使いたくないんですよ。それに、もう一つの方の二つ名も捨てた思いは無いのです。だから速く終わらせて新しいリボルバー作ってくださいよ?。」

一夏：「了解、じゃあさっさと終わらせるぜ……」

蘭

???↓蘭：「はい!!」

赤髪の少女：蘭は一夏のとなり立ち、持ってきた銃のひとつ

(※) 雀蜂を構える。

(※) 龍が如く OF THE ENDで装備出来るサブマシンガンの  
一つ)

死神連合：「げえっ?!?り、リボルバー・(※) オークキッドだど!?!」

(※英語で蘭の意味)

死神連合：「落ち着け!!リボルバー持ってないあいつなんかただの  
貧乳おん「蘭」だれが貧乳ですか!?!」ズガガガガアン!!」うわっ!?!」

一夏：「おまけだ!!こいつを持ってけ!!」

一夏はグレネード6個をまとめて山なりに投げた。

死神連合：「ハッ!!そんな山なりに投げたら避けるのかんた「蘭」そ

こです!!」カントツ!!ドツカアアアオントツ!!」

なあああああ!!!」

グレネードが爆発する前に蘭がグレネードの一つを狙い撃ちして他のグレネードをまとめて爆発させる。

この攻撃でこの場にいる死神連合は部隊の大半が戦闘不能になった。

死神連合：「嘘だろ... あんなにいた仲間がほとんどやられっちまった!!!くそっ!!退け!!退けえええ!!」

死神連合はこれ以上被害を増やさないためか残った部隊を退却させる。

死神連合：「くそっ!!覚えとけよお前ら!!俺達にはまだまだ大量に仲間がいるんだ!!次は絶対ぶつ殺して「ズガアン!!」ぐあっ!!」

一夏：「二度と来るな屑共」

蘭：「なんとかなりましたか...」

一夏：「ああ、けどまだ軍団はまだまだ大量に残ってるみたいだな。っていうかそれよりもあの子達だ!!」

一夏と蘭は慌ててバリケードを片付けワイルドキャットに入る。

一夏：「羽狛さん!!あの子達は!?!」

羽狛：「大丈夫だ、最初にできた傷以外は何ともない。手当ても終わった。」

一夏：「そうですか... ごめんな、俺のせいで怪我をさせてしまつて...」

女の子1：「う、ううん、お、お兄ちゃんは悪くないよ...」

女の子2：「悪いのはさっきの奴らよ!!次あつたら容赦しないんだから!!」

女の子3：「むしろお礼を言わせてよ。助けてくれてありがとう。」

一夏：「そう言ってくれると助かるよ... 羽狛さんもすいません。俺のせいで店がこんなになっちゃった。」

羽狛：「今回はしょうがねえよ... それよりもこれからどうするか... 店がこれだから暫くは商売できねえぞ...」

一夏：「その事で確認したいんだけどさつき頼んだ番号って二つとも連絡した？」

羽狛：「？ああ二つとも連絡したけど？」

一夏：「なら良かった、暫くしたら店の改装費と謝罪金をある人が持つてきてくれるからそれで店を直してよ。」

羽狛：「ならいいんだが…これからどうするんだ？」

一夏：「とにかくあいつらをどうにかしないと安心して特地に戻れないしなあ…その前にこの子達を家に送ってやんねえと…君達!!送っていくから自分が住んでる場所をおしえてくれ。」

女の子3：「えっと…場所はIS学園です。」

蘭：「ええ!?まだ高校生の年じゃないでしょ!？」

女の子3：「飛び級扱いなんです私達。」

一夏：「そうか…好都合だな。」

蘭：「あ、そうかIS学園は非常時とかじゃ無い限り絶対に入れませんから安全ですね!!」

一夏：「それにIS学園には仲間が2人いるし、事情を話せば協力してくれるはずだ。というわけで東さん、暫くあれは預けます。この件が終わったらまた連絡させてもらうんですいませんけど…」

東：「わかったよ、ちーちゃんと箒ちゃんよろしくね。」

そういつて東はワイルドキャットを出た。

一夏：「よし、それじゃあ行こうか。」

蘭：「私も行きますよ。説明する人は多い方がいいですしね。」

一夏達はIS学園に向かう。

## 地下とチームと装備調達①

Side：IS学園

一夏達がワイルドキャットを出て数時間が経過した。

一夏達は電車等乗り継ぎIS学園校門前にいた。

しかし・・・

IS学園生徒：「死ねええええ!!」

一夏：「何でああ!?」

学園の受付に入ろうとした瞬間、いきなりISを装着した生徒に襲われた。

一夏：「いきなり武装もしてない奴をISで襲うな!!」

生徒：「うるさい!!男が女に齒向かうな!!」

蘭：「典型的な女尊男卑ですか・・・最悪ですね。」

生徒：「あんたも男なんかに従うな!!」

蘭：「うるさいですよ・・・さっさと失せるか千冬さんか鈴さんと呼んで来てください。」

一夏：「おい蘭、お前そんなキャラだったか?お前そんな口悪く無かっただろ。とにかく、織斑千冬か凰 鈴音、篠ノ之箒を呼んでくれ。俺達はその人達に使があつて「ガンツ!!」くっ!!」

生徒：「殺すわよ、あんたみたいな男が千冬様に会えるわけ無いでしょう!!」

一夏：「しゃーねえなあ・・・先に手出したのはお前だ、正当防衛だ!!攻撃させてもらうぜ!!!」

ズガン!!バキツ!!スバツ!!パラパラララッ!!

(※R―18指定です。しばらくお待ちください)

数分後・・・

生徒：「そ、そんな、あい、えすがあ、ま、けえ」ガクリッ!!

一夏：「やり過ぎたかな？A I Sおもいつきり使っちゃったけど...」

蘭：「これくらいなら大丈夫でしょ。あつちはI Sで攻撃してきたんですから。おあいこです。」

女の子3：「お兄ちゃん達すごいね。」

女の子2：「これどうするの？さすがに銃撃たないとやられてたかもしれないけど...」

教師：「な、なんですかこれは!？」

戦闘の音に気づいたのか緑髪の教師が慌ててこちらにやって来た。

女の子1：「あ、先生きたよ、お兄ちゃん。」

一夏：「あ、この先生ですか？すいませんお騒がせして。ちよつとこの生徒を送るために来たのと織斑千冬に用があつたんですいませんけど呼んできてくれませんか？一夏が来たつて言えばわかると思うんで。」

あと、そこに転がってる女は正当防衛でボコつたんで保険医かなんか呼んでやってください。これは正当防衛の証拠です。」

数分後

千冬：「一夏!!」

一夏：「千冬姉、久し振り。」

千冬：「どうしたんだ急に？お前、いつ帰ってきたんだ？」

一夏：「色々あつてな。帰ってきたのはちよつと前だ。それよりも場所を変えよう。実は面倒なことがあつてな...」

事情説明中

千冬：「なるほどそんなことが...」

一夏：「とにかくあいづらを何とかしてからじゃないと安心して特地上に戻れないから片付けてから帰りたいんだ。」

千冬：「それはわかった。だが送るためだけに来たのか？何かまだあるんじゃないのか？送るだけなら蘭も一緒に来る必要は無いだろ？」

一夏：「実はこの学園に仲間が二人いるんだ。一人は鈴、もう一人



は…。」

???：「私のことでしょ、一夏君。」

一夏：「ああ、そうですね。久し振りですね、

刀奈さん。」

???：「フフ、久し振りね一夏君♪あと、悪いけど楯無って呼んでくれるかしら。」

一夏：「楯無ってことは襲名出来たんですね。おめでとうございませ。」

???↓楯無：「ありがとう。それよりも死神連合と戦うなら丁度いいタイミングね。」

一夏：「?丁度いいタイミング?」

蘭：「どういう事ですか?」

楯無：「説明するけどその前に鈴ちゃんを呼びましょう。あの子ども参加するって言うと思うから」

鈴：「そうね、絶対参加するわ。」

一夏：「うおっ!鈴、お前いつから?」

鈴：「今来たところよ。それよりも早く説明して。」

楯無：「実は死神連合が復活したのは結構前に知ってたのよ。私も直ぐにもう一度潰そうとしたけどどうもあいつらバックが結構ヤバイ奴だったのよ。」

一夏：「誰ですか?」

楯無：「南師（みなみもと）よ。」

一夏：「マジかよ!!!」

蘭：「でもこれであいつらが大量の銃と兵隊を用意出来た理由がわかりましたよ。」

千冬：「?」どういうことだ?」

鈴：「あいつは二年前の私達と死神連合との戦いで捕まえることが出来なかった奴でね、主に裏方を担当してたんだけど自分の実力を隠してたの。何発もゴムスタンを喰らわせても全然効かなくて倒しきれなくて逃げられたのよ。」

一夏：「しかもあいつの特技は一種の洗脳って言っているのか? 若い奴とか強い奴をほぼ確実に従わせることが出来るんだよ。おまけに金持ちで武器の調達もお手の物だ。奴のコネで武器商人から安く武器を買えるしその商人のコネがヤクザ関係者でそこから死神連合の兵隊を調達してんだ。」

蘭：「さらにさっきのやつらが言っていた刑務所の中で仲良くなったヤクザも追加されてるとしたら... とんでもない数になりますね...」

楯無：「あの戦いが終わってから南師の居場所を探してたんだけどつい最近まで見つからなくてね。けどようやくあいつの居場所を突き止めたわ。」

蘭：「何処ですか?」

楯無：「ポークシティよ。」

一夏：「あそこか... 面倒な場所にいやがつて。」

ポークシティは渋谷エリアにある建物の一つで、13階建ての大きなビルである。

楯無：とにかく、私達更識は3日後にポークシティに突入する作戦をたてた。けどメンバーの大半がある事件の捜査に行かなくてならなくなったのよ。」

一夏：「そこに俺達が巻き込んだ女の子をここに送って事情を説明しているところにこの作戦を説明して、」

蘭：「私達も参加できるようにしたって事ですか?」

楯無：「そういうこと。裏方を除いてメンバーは実質私達しかないな

くなつたからね。それに聞いたら絶体参加するって言うでしょ?」

一夏：「確かに。要は少数精鋭で戦うってことか…。良いねえ、死神連合との最後の戦いを思い出す。」

楯無：「その様子だと弾君も呼ぶんでしょ?」

蘭：「はい。お兄のあれがあるだけで大分戦い方が変わりますからね。」

一夏：「決まりだな。楯無さん。早速準備しましょう。千冬姉悪いけど。」

千冬：「わかっている。遠慮は要らん、思い切り暴れてこい。」

???：「その作戦…。悪いけど私も参加させてもらおうよ。」

その時誰かが部屋の中に入ってきた。入ってきた人物は赤髪の長身の女生徒だった。

一夏：「?誰だ?」

???：「私はベルベット・ヘル。ギリシャ代表候補生よ。」

一夏：「ギリシャの代表候補生?何でああなたが死神連合と戦う?」

???↓ベルベット：「簡単よ。貴方が助けた女の子の中で怪我をした子がいるでしょう。あの子は寮で私と同部屋で保護者みたいなものよ。私はあの子を傷つける者を許さない。」

蘭：「成る程…。一夏さん、楯無さん。」

一夏と楯無は顔を見合せ同時に頷いた。

一夏：「ベルベット・ヘルさん、俺達は貴女の本作戦の参加を歓迎します。」

楯無：「それじゃあメンバーも決まった事だし早速準備に取りかかりましょう!!武器の点検、残弾確認をしつかりね!!」

一夏：「残弾…。あ!!し、しまったああああ!!!」

蘭：「どうしたんですか急に?」

一夏：「さっきの戦いで弾全部使っちゃった!!」

全員：「ええええええ!!!」

一夏：「と、とにかく補充しねえと…。ってよくよく考えたらベルベットさんの武器もねえぞ!!」

鈴：「一夏、あの場所ならその二つを同時に解決出来るんじゃない

？」

一夏：「あそこか・・・よし、弾と合流してからあそこに行こう。弾は今どこに？」

蘭：「お兄ならアジトにいると思います。まずは渋谷まで戻りましょう。」

一夏：「それとベルベットさんには俺達のチームに入って貰います。そうした方が色々役にたつことがありますからね」

Side：東京：渋谷エリア：???

渋谷エリアは平成から新たな元号に変わってから数年後、新たな都市開発が始まった。

平成の良き部分を残し新たな渋谷を作る。

それが新たな都市開発のテーマだった。

しかし、当時の渋谷を愛する者達が都市開発に反発し一部の開発が失敗に終わった。

他の場所は新しくなり人の集まりがたくさん出来るようになった。寂れた商店街があった場所は新しい店が開いてかつての活気が戻り賑やかになった。

老朽化が進んだ場所は壊され新たな建物や駅などに生まれ変わった。

だがあえてそのままの状態の場所もあった。

当時の若者達が残して欲しいという願いがあったからと平成という時代に生きた若者達の大切な思い出が沢山あったからだ。

そして現代、都市開発の一つに巨大な地下施設を作ろうとする計画があった。

しかしその計画は失敗に終わった。

だがある人物がその失敗した場所を密かに開発し、一般の人物が入りにくい新たなエリアを作った。

そしてそのエリアは現代の若者達の一部とエリアを造った人物達が入れるようになり、その者達からこう呼ばれるようになる。

渋谷アンダーグラウンド、通称渋谷UGと・・・

一夏達のチームのアジトがある場所は渋谷UG（※以後UG）の中にあり、まずはUGの中に入る必要があった。

UGに入る方法は大きく分けて4つの方法がある。

1：地下への入り口に立っている監視員に合言葉を言ってUGに入る事が出来る許可証をもらう。中に入れるのは許可証を発行してもらった日から2日間だけ入ることが出来る。

2：UGでチームとチームの拠点を作り、拠点の場所をUGを管理する人物に連絡し、常時中に入ることが出来るチーム専用許可証を発行してもらって監視員に見せる。

但し、新しいチームメンバーがUG内に入るのが初めての場合は1の手順で新入りを入れさせ、入ったその日から1週間以内に新入りのチーム専用許可証を発行してもらおう必要がある。

3：マンホール等の監視員の目が無いところを探しその内部を移動しUGの場所を探し、潜入する。但しこれは許可証を貰っていないので発見されると追い出される。さらにあまりにひどいと出禁を喰らうか最悪の場合攻撃されることもある。

4：強行突破。これをしてUG内部に入ると中にいるUGの住人達から容赦無しの集中攻撃をされ、下手をすると死ぬ。

なので実質1・2の方法が安全にUGに入ることが出来る手段である。

今回は一夏達はチームメンバーではないベルベットがいるためベ

ルベットは1の方法で入ることになった。

一夏：「よう、悪いんだけど中に入れさせてもらえるか？」

若者：「・・・許可証は？」

一夏：「俺達はある。けど後ろの赤髪の人は今回入るのが初めてで俺達のチームに入ってもらってから赤髪の人は合言葉で頼む。」

若者：「合言葉はなんだ？」

ベルベット：「狂った祭りは今日も何処かで行われている。これでもいいかしら？」

若者：「正解です。これが許可証です。どうぞ中に。新しいチームメンバーは1週間以内にチーム用の許可証を発行してもらってください」

一夏：「ごくろうさん。これは差し入れだ。良かったら食ってください。」

若者：「どうも。」

一夏達は中に入っていく。

Side：東京：渋谷UG地下一階

ベルベット：「日本にこんな所があるなんて・・・」

鈴：「驚くのはまだ早いわよ。もっと驚くものがここにはあるんだから。」

中にあつた長い階段を一夏達は降りていく。その先にあつたものはとても地下とは思えないほど眩しい場所だった。

更に奥に進むとそこには若者達が話をしたり、物を買ったり、店が作った食べ物を買ったりしていた。

UG地下一階は若者達が違法ではないかぎり色んな物をを売ることが出来るエリアである。

一夏：「懐かしいなあ。ここは二年経っても変わってないなあ。」

蘭：「懐かしいのは良くわかりますよ。けど今は、」

一夏：「ああ、わかっている。まずはアジトだ。アジトの場所は変わっていないよな？」

蘭：「はい、このエリアの一番奥にあります。」

移動中…

一夏達のアジトは大きな二階建てのガレージみたいな場所だった。蘭が入口の鍵をカードキーで解除して中に入る。

蘭：「お兄!!降りてきて!!」

弾：「なんだよ、蘭…俺は徹夜の作業が終わったから寝ようとしてたのに…」  
「パアンっ!!」  
「いつでえ!!」

蘭：「寝ぼけてないでさっさと私の後ろの人を見る!!」

弾：「あん?って一夏なのか…?」

一夏：「ああそうだ、久し振りだな弾!!」

弾：「やつと顔でしたか!!心配させやがって!!!このこの!!」  
「ドスツ!!」  
「ドスツ!!」

一夏：「いでで!!おま、やめろ!!」

これが一夏の最高の親友の弾との再会だった。

数分後

事情説明中…

弾：「成る程な、そう言うことなら俺も参加する!!丁度俺達の相棒の整備が終わったとこだ!!」

一夏：「決まりだな。けどお前徹夜したんだろう?少し休め。俺は先にベルベットさんのチーム参加の手続きをしてくる。」

ベルベット：「そういえばチームってさっきから言ってるけどチーム名は何なの?」

楯無：「それは後のお楽しみってやつよ♪」

一夏：「蘭、悪いけど一緒に来てくれ。場所は覚えてるけどどうろ覚えの部分もあるからな。鈴と楯無さんは悪いけどここで待機してくれ」

蘭：「良いですよ。二年もここに来なかつたらそうなりますね普通。」

鈴：「何かあったらすぐに連絡しなさい。直ぐに行くから。」  
少年少女移動中…

Side change

Side：東京：渋谷UG地下三階

一夏達が向かったのは地下三階のUG管理エリアだ

ここではUGの管理者達がいるエリアで主にチームの手続きやUGの施設拡大関係をメインに取り扱っている。

一夏達はチーム関係の手続きをする建物に入った。

受付：「ご用件はって一夏さん!!」

一夏：「おう、久しぶりだな。」

受付：「お久しぶりです。貴方がここに来たってことは、新しいメンバー関係ですか?」

一夏：「そうだ。後ろにいる赤髪の女の人がそうだ。」

受付：「わかりました。では早速手続きをしますね。」

???：「その手続きは俺にやらせろ。」

受付：「あ、リーダー!!」

???：「久しぶりだな一夏、調子はどうだ?」

一夏：「ボチボチだ、そっちはどうだ?アラタ?」

このエリアのリーダー、アラタがやって来た。

???↓アラタ：「こっちもだ。それよりあの後ろの子が新しく入ったメンバーか?」

一夏：「ああ。」

アラタ：「よし、今回は俺がチーム関係の説明をしてやるとするか。嬢ちゃん!!!手続きと説明をするからこっちにきてくれ!!!」

アラタはベルベットにチーム関係に必要な書類の書き方を教えたあとチームの決まりとUGのルールを説明する。

アラタ：「いいか、嬢ちゃん。これからチームのことについて説明する。」

アラタ：「チームのルールについてだが、

①チームを登録するには最低3人のメンバーが必要。

②UG内でアジトを作る際は必ずこのこと施設拡大担当者から許可を貰うこと。

③手続き完了後に渡す許可証をUG内にいる際は緊急時以外必ず持ち歩くこと。



④何らかの事情で許可証を無くした時は直ぐにここに連絡すること。

⑤チームに所属するとクエスト、簡単に言えばUGの内外で起きた依頼を受けることが出来る。成功するとUG内で使える通貨を報酬で獲得することが出来る。

⑥チームとチームで戦うチームバトルをする事が出来る。詳しいルールは一夏達かバトルエリア：：地下四階にいるやつに聞くとい

い。チームについてはこれくらいだ。」

アラタ：「次はしてはいけないことだ。

①：人殺し、暴行、泥棒、詐欺、麻薬などは厳禁

②：バトルエリア外での銃などの武器の使用も厳禁。

銃などの武器の使用時のルールは

非常時や、チームバトルとクエスト時の殺傷能力がある武器は許可が出てる場合を除いて使用してはいけない。

非殺傷の物なら使用可能。但し、実弾と非殺傷の二つとも地上での武器の使用は正当防衛時、一般人の救助の場合などやむなく使用しないときに使用することが出来る。

相手がルール違反等で実弾を使って来た場合は実弾で撃ち返してもいい

地上で使用する場合は緊急時以外信号弾かUGのここの番号に連絡する事。地上にいる人を攻撃してはいけない。但し、人助けの為に可

ら可  
③：闇討ちなどの奇襲はしてはいけない。但しルール違反のチームを襲う場合は闇討ちが可能となる。闇討ちする際はここに連絡する事。

④：上記を破った場合は嚴重な罰が与えられるか討伐依頼のリストに追加される。ルール違反をしたチームを討伐した場合は討伐したチームか個人に報酬が出る。

こんなところだな。これで手続きと説明を終わる。何かあったら

ここに来るようにしな。じゃ、気をつけてな。」

手続きが終わり、一夏達はアジトに戻った

Side：東京：渋谷UG地下一階：アジト

一夏：「これでベルベットさんも正式に俺達のチームの一員だ。あとは武器の調達なんだが…その前に蘭、お前にプレゼントだ。」

蘭：「プレゼントですか？」

一夏：「実はだな…こっちに戻ったらお前に渡そうとした物がある。あつちで作った銃だ。」

蘭：「どんな銃ですか？」

一夏：「まずはこいつだ。」

一夏は机の上にハンドガン二挺をおく。

蘭：「これは…45口径のM119A1ですね…はっ!!こ、これは…!!

鏡のように磨きあげられたファイディングランプに強化スライド、更にフレームとのかみ合わせをタイトにして精度を上げてありますね。3ドットタイプのサイトシステムにサムセイフティも指をかけやすいように延長されてる…トリガーは滑り止めグリップがかけられたロングタイプですね…リングハンマーにハイグリップ用に付け根を削りこまれたトリガーガード…それだけじゃない。ほぼすべてのパーツが入念に吟味されてカスタマイズされてます…!!こんな凄いハンドガンは初めてですよ…まるでネイキッド・スネークが使っていたカスタマイズみたいです…それも二挺も…」

一夏：「正解だ蘭。MGS3のカスタマイズ仕様を再現した。しかも通常弾以外にも麻酔弾、AIS弾も使用出来る。これ1挺作るの大変なんだぜ？足りない部品は自作したし、気に入らない場所があったら直ぐに作り直した。オマケにもう1挺は2丁拳銃が出来るように左撃ち用だ。どうだ？気に入ったか？」

蘭：「凄い…本当に凄いですよこれ…」

一夏：「次はこいつだ。お前が好きなゲームのキャラが使う銃だ。」

蘭：「!!これってブルーローズですか!!」

一夏：「大正解だ。使用弾はAIS M500弾だ。AISリボル

バーを改造して装弾数6発のシリンダーに変更と銃口を一つ追加した銃だ。A I S M 5 0 0弾は通常弾よりも発射時の反動と衝撃はかなり少なくなってるから連射しやすいぜ。次はこいつ、二丁拳銃として使うこと前提の銃、ブレストリガーだ。」

蘭：「とんでもないもの出してきましたね。これマガジンの下に斧みたいな刃がついてるし銃口下にも銃剣ついてるやつじゃないですか。」

一夏：「連射性能が凄く高い銃だ。お前のもう一つのアダ名にぴつたりなやつだろ？さて、次で最後だ。蘭が大好きなあの銃だ。あと、ベルベットさんには、通常仕様の銃を渡す。」

蘭：「シングル・アクション・アーミー…。やっとこれで戦うことが出来ます…。けど何か普通のやつより重くないですかこれ？」

一夏：「そりやそうだろ。そいつはA I S弾と通常弾が使えるようにした以外にも壊れにくいように金属部分はI Sの装甲板に使われてるやつで強化してるからな…。いやでも重くなるさ。2丁拳銃で使うだろうから今持つてるやつを含めて大量に作った。何かあつても当分はそれで大丈夫だろ。」

蘭：「成る程」

一夏：「ベルベットさんのはさつき言った通常仕様です。何でこいつを渡したかって言うとチーム名と関係があるからです。」

ベルベット：「どういうこと？」

一夏：「シングル・アクション・アーミー、略称S A Aは昔アメリカ西部開拓時代の保安官が愛用していた銃なのは知ってますか？」

ベルベット：「…。聞いたことはあるわ。」

一夏：「西部の保安官はこいつを使って平和を作ったという話があつてその事からS A Aはピースメーカーって呼ばれるようになった。俺達もその保安官みたいに平和を作りたいてって思いからこのチーム名をピースメーカーって名前にしたんです。」

弾：「まあそれ以外にも俺達のチーム結成時に最初に使ってたのがピースメーカーだったつてのもあるけどな。」

一夏：「改めて自己紹介させて貰います。チーム：ピースメーカーの

リーダー織斑一夏です。」

弾：「同じくピースメーカーの副リーダーをやってる五反田弾だ。よろしく。」

鈴：「知ってると思うけど風 鈴音、ピースメーカーの突撃担当よ。」

楯無：「更識楯無よ。ピースメーカーの作戦考案及び情報収集を担当してるわ。」

蘭：「ピースメーカーのサポート担当の五反田蘭です。よろしくお願ひします。」

ベルベット：「ベルベット・ヘル：。今日から世話になるわ。よろしく。」

弾：「そんじゃ、自己紹介も終わったことだし武器の調達に行こうぜ。場所は地下2階だ。」

## 地下とチームと装備調達②

S i d e : 東京 : 渋谷UG地下2階

地下2階は宿泊施設や酒場がメインのエリアだ。

そのエリアは20代後半の人物が多く、15歳以下は入ることが出来ない場所が多く存在する。

その中の一つにある宿泊施設があった。

一夏達はその宿泊施設に入つて行く。

受付 : 「当宿泊施設へようこそ。宿泊でしょうか？」

弾 : 「下のバーに用がある。新しいメンバーの歓迎をしたくてな。」  
すっ…

受付 : 「それはそれはおめでとうございます。(チラツ)… 成る程それ以外にもご利用があるそうで… 合言葉をお願いします。」

弾 : 「スピリタスをストレートで。酔い潰すにはこれが一番だ。」

受付 : 「いいでしょう。こちらをどうぞ。バーの入口にいる者に今渡したのを見せバーにお入りください。」

弾 : 「どうも」

(※ちなみに余談ですがスピリタスはお酒の種類の中でも一番高いアルコール度数のお酒と言われており、その度数は96度ととても高い数字です。ですのでもし飲む時は絶対に火気厳禁です!!というかストリート飲めたら凄いです。まあ、ある漫画では普通に飲んだりしてる人がいますが…)。

一夏達はバーの入口にいる従業員に受け取ったものを見せ、中に入つて行く。

中には一人の男がいた。

バーのマスター : 「お久しぶりです。一夏様、ピースメーカーの皆様。後ろの赤髪の方は新入りの方でしょうか？」

一夏 : 「お久しぶりですマスター。後ろの人は新しくチームに入つたベルベットさんです。それよりテイステイングしたいんですけど大丈夫ですか？」

マスター : 「大丈夫ですよ。実はいつかあなたが帰ってくる時が必

ず来ると思いとっておきを用意しました。」

マスター：「それに死神連合と戦うと言うことを楯無様から連絡を頂きましたのでさらに装備を追加で用意させて頂きました。その新しいメンバーの方にも使いやすい物が中にはありますので…奥の部屋へどうぞ。」

マスターに連れられ奥の部屋に入る。中には大量の武器がきれいに整頓された状態で並んでいた。

マスター：「では、まずはこちらから…ハンドガンのFNファイブセブンでございます。使用弾は5.7×28mm弾です。小銃用の弾丸を小さくしたといわれる弾薬を使用し、貫通力が高いと言われています。これを改造し威力を上げております。装弾数は20発です。」

一夏：「これはベルベットさんをお願いします。次の銃をお願いします。」

マスター：「かしこまりました。では次の銃に移らせて頂きます。次の銃はリボルバーです。S&amp;WのM19です。」

蘭：「コンバット・マグナムですか…いい銃です。」

マスター：「装弾数6発、銃身は4インチのタイプです。かなりの威力を持っており敵をダウンさせやすい銃です。これは一夏様がお使いください。ではここからはご要望の銃をお探しします。どんな銃がよろしいでしょうか？」

ベルベット：「近くの敵に有効な銃をお願いします。出来れば撃ちやすい物がいいです。」

マスター：「近くの敵に有効…ならばショットガンタイプの銃がいいでしょう…これはどうでしょうか？イサカM37です。ポンプアクション式で一度撃つごとにスライドを操作しなくてはなりません。確実に次弾装填が出来るためオススメです。」

ベルベット：「…貫います。次はどんな銃がいいかしら…？」

弾：「そうだな…次は…撃ちやすくて連射が出来るやつはあるかマスター？」

マスター：「勿論……これをどうぞ。サブマシンガンのFN P90です。使用弾はファイブセブンと同じく5.7×28mmを使用します。」

一夏：「成る程、確かにそいつは撃ちやすい銃だ。次は俺の銃で至近距離で使う銃……出来れば片手で撃てて小さめのやつがあったら助かるんですけど……」

マスター：「……そうですね……衝撃は強いですけど今の一夏様なら使えるかも知れない銃が一つございます。少々お待ち下さい………ありがとうございました、これです。水平二連式ソードオフショットガンです。一度に12ゲージの弾を2発同時発射出来るようにし、トリガーは両引きから1つに変更、リロードもしやすいようになっております。今の一夏様ならこれを片手で撃てるはずですよ。」

一夏：「うわぁ……これの直撃受けたらとんでもないことになるな……」

マスター：「その他にご要望の物はございますでしょうか？」

一夏：「俺と蘭、ベルベットさんに何かオススメを……でかくて、大胆なのがいい」

マスター：「でかくて……大胆……わかりました。ではまず蘭様の銃から私のオススメをお渡します。蘭様にはこちらを……イタリヤ製最高傑作と言われたショットガンのベネリM4スーペルP90です。セミオートのショットガンです。よくあるポンプアクションではなく、ガス圧式なので連射しやすい銃です。」

蘭：「凄い……これなら豪快に敵を仕留められますね……」

マスター：「次は一夏様の銃です。私が一夏様にオススメする銃はこちらです。「ゴソゴソ、ガタツ!!」ぜえ、ぜえ」

一夏：「大丈夫ですか？マスター……ってデケエ!？」

マスター：「は、ハイパーバズーカ改でございます。ガンダムシリーズに出てくる物を人が持てるサイズで、再現し重量を軽くし、使用出来る弾をいくつか追加しました……弾は、後、程、用意しますので……ふう……」

一夏：「大胆にも程がありますよ!?!敵を木っ端微にするつもりです

かマスター!?!貫いますけど!!」

鈴：「相変わらずとんでもないもの出すときあるわねマスターって…。」

マスター：「次はベルベット様の銃です。ベルベット様には…これはどうでしょうか？バレットM82です。」

弾：「ってそれアンチ・マテリアルじゃねえか!!さつきよりはまじだけど(※) さすがにアウトだ!!」

楯無：「人の体に大きな穴が開くわよそれ!!」

鈴：「ってか動きながら絶対撃てないわよ!!」

(※さすがにアウト…アンチ・マテリアルは威力が高すぎるため人に向けて撃つのは禁止されている。)

ベルベット：「…：…：…恐ろしいわね…。」

マスター：「他にご用件はございますでしょうか？」

楯無：「弾をありったけと何かデザートをお願い…全員分ね…」

マスター：「デザート…ならこちらはどうかでしょうか？ナイフセットです。様々な種類のナイフ以外にもクナイなどもございます。あとは…グレネード関係ですね。オリジナルの試作品も付けておきます。あと鈴様にはこちらを、貴方が使用する銃に着ける銃剣です。ISのブレードに使われる金属を使用し、通常よりも長く頑丈で切れ味抜群になっております。」

鈴：「ありがとう、マスター。これであれを使った戦いがやりやすくなったわ。」

一夏：「あとマスター、前に預けてたやつを返してほしいんですけど…」

マスター：「あれですね。少々お待ちを…：…お待たせしました。貴方の愛刀雪走と雪花です。手入れはしていますので直ぐにお使いになれます。あとはこちらですね。ベレッタM92Fを連射しやすくした貴方の愛銃白夜と月光です。」

一夏：「ありがとうマスター。」

マスター：「いえいえ、これくらいお安い御用です。さてここからは一夏様帰還祝いの品でございます。これはほかの皆さまにも差し上



げます。まずはこちらを…ローラーダッシュユアーマーでございませす。とても頑丈に出来ており、見た目に反してとても軽く装着した状態でも普通に歩くことが出来ます。弱点はバッテリーフル充電で30分しか使用できないことです。」

一夏：「どこぞの装甲騎兵みたいにくいいにキュイイイんって飛ばしながら突撃嗙ませってか？」

蘭：「どうかあんなの普通出来ないのでから!!」

マスター：「出来ますよ? (※) 以外と簡単ですよあれ。あと装甲騎兵の装備ありますよ? ヘビイマシンガンとかその改良版とかシヨルダーミサイルポッドとか。」

一楯弾鈴：「貰う。」

蘭：「即答!」

(※そんなことありません。)

マスター：「さて、次はこちらをISの理論を使った最新型収納装置です。これなら武器などを大量に持ち込むことが出来ますよ。あとは…うん? 蘭様失礼ですがそのホルスターの銃は?」

蘭：「?これですか? 一夏さんが作ってくれたブルーローズです。」

マスター：「ブルーローズ…!!素晴らしい…!!まさかあの名作ゲームの銃を作ってしまうとは…!!しかしそれだけではあのキャラの再現率は低いですね… 蘭様には特別にこちらを差し上げます。一夏様、すいませんが持ち上げるのを手伝って貰ってもよろしいでしょうか?」

一夏：「いいですけどなにを出すつもりですか?」

マスター：「蘭様が持っている銃の使い手は機械剣も使っております。しかもとても強力な物を」

一夏：「ってちよつと待った!!まさか!」

マスター：「そのまさかでございます。蘭様にはこちらを…レッドクイーン改でございます。見た目に反して重量は軽く簡単に振れるだけではなくとても頑丈で刃こぼれしにくく、切れ味抜群です。実際の物のようにイクシードもちゃんと使えますし分解も出来ますよ。」

一楯弾鈴：「とんでもないもの作りやがった!!」

ベルベット：「……？」↑どういうことかわからない。

蘭：「すごい……細かいところまでちゃんと再現されてる……早く使ってみたいです……」

鈴：「ちよつと蘭!?絶対生身のやつに(※)イクシードは使わないでよ!?生き物が真つ二つになるとこなんか見たくないわよ!!」

(※)イクシード：「レッドクイーンにはジェット推進機の様なものも搭載されており、柄にバイクのアクセルの様なものもが着いていてそれを捻ると推進剤が作動してレバーを引くと推進剤が噴射して斬撃を加速及び強化される。」

マスター：「あとは……このゴーグル型ディスプレイをどうぞ……最新式のもので地図のデータがあれば目的地までの距離と現在地が解りますし暗視装置付きで暗いところだつてもよく見える優れものです。次は……」  
「???:「そこから先はわたくしが担当させて頂きますよ……」」

一夏：「鮫嶋さん……お久しぶりです。」

???:「鮫嶋：「お久しぶりでございます。UGによく戻られました。」  
鮫嶋：「聞きましたよ?何でも死神連合の連中と戦ったようですね。」」

一夏：「流石UGを作ったメンバーの1人ですね……まだそんな経つてないのに情報を入手するのが早すぎだ……」

鮫嶋：「ふふふ……まあその話はここまでにするとして……一夏様、三日後にパーティーに出席すると言う話を聞いたのですがこれは本当でしょうか?」

一夏：「ええ、奴らをぶっ飛ばしに行くつていう最高のパーティーにね。」

鮫嶋：「なら正装を着ませんか……その服装でもよろしいのですがやはりパーティーはパリツと決めることができる服装で行きませんか……」

弾：「パリツとした服装か……」

鮫嶋：「今回は一夏様が帰ってきた記念です。特別に無料をご用意しましょう。」

楯無：「いいの鮫嶋さん？」

鮫嶋：「良いのです。これくらいお安いご用です。」

一夏：「ありがとうございます。」

マスター：「鮫嶋様。申し訳ありませんがもう少しお待ちしてもらってもよろしいでしょうか？私の方は次の物で終わりますので・・・」

鮫嶋：「おっと、すまないマスター、続きをやってくれ。一夏様終わり次第この施設の2階まで来てください。服の採寸をしますのでは・・・」

鮫嶋はバーを出ていった。

マスター：「今から出す武器でお渡しする物は終わりです。

最後にお渡しする武器は・・・ R P G ー7です。」

マスターは R P G ー7のランチャー部分と弾が大量に乗せられた台車を押してきた。

ピースメーカーメンバー：「ちよつと待てエエエイイ!!」

一夏：「何で対戦車兵器!？」

弾：「そんなもん日本で使ったらとんでもないことになるわ!!」

マスター：「皆さま落ち着いて下さい。これを出した理由をお話します。」

ベルベット：「・・・理由?」

マスター：「・・・これは噂なのですが死神連合は人間の兵隊だけではなく、最新兵器を手にいれたらしくどんな物かまではわかりませんが、どうも嫌な予感を感じるのです・・・もしかするとこれでも倒せない可能性がございます。」

一夏：「成る程・・・わかった。そういうことならありがたく頂きます。よし、これで装備は集まった!!マスター、こいつは今回の武器の代金だ。受け取って下さい。」

一夏はポケットの中から金貨を10枚取り出しカウンターにおいた。

しかし、マスターは受け取らずに一夏の方に金貨をそつと押し返した。

マスター：「……お代は要りません。全部持って行って下さい。」  
一夏：「!?マスター!?!」

マスター：「わたくしは嬉しいのです。貴方があの日からいなくなっても恩を返すことが出来ないと思うととても辛かった……それでも恩を返すことを諦めることが出来ず、せめて貴方がいつ帰ってきてもいいように装備を集めていたのです。」

マスター：「そして理由はどうあれ貴方はここに帰ってきてきて再会することが出来ました。これは今の私が貴方に出来る恩返しでございます。ですからお代は要りません。」

一夏：「マスター……そうか、ならありがたく貰っていきます。次はちゃんと代金は払いますよ。それと次来たときはそうだな……（※）ホワイト・スパイダーでも作って下さい。俺が酒を飲むときは二十歳になるまではここか祝い事、誰かの別れぐらいの時ぐらいしか飲めないですから。」

（※ホワイト・スパイダー……カクテルの一つでウォッカをベースにしたカクテル）

マスター：「わかりました……必ず用意します。」

一夏：「じゃ、俺達が出るよ。また来ます。」

一夏達はバーを出ようとする。

マスター：「一夏様、ピースメーカーの皆さま」

一夏：「?」

マスター：「どうぞ楽しいパーティーを……」ペコリ……

一夏は頷いたあとバーを出た。

数分後

施設2階

鯨嶋：「お待ちしておりました一夏様。では早速採寸をしますので女性の方は此方へお願いします。」

鮫嶋：「一夏様これはフォーマル用にしますか？それとも社交用で  
しょうか？」

一夏：「社交用で。」

鮫嶋：「服をお召しになるのは昼と夜どちらでしょうか？」

一夏：「昼と夜の服を1着・・・いや俺のは2着頼めますか？」

鮫嶋：「大丈夫でございます。スタイルは？」

一夏：「鮫嶋さんのおすすめで。」

鮫嶋：「ボタンの数は？」

一夏：「2つ。」

鮫嶋：「ズボンは何？」

一夏：「動きやすい物で。」

鮫嶋：「裏地はどうしましょうか？」

一夏：「・・・勿論実戦用だ。」

鮫嶋：「ではこちらの裏地を使いましょう。今から実演で効果をお  
見せしますので・・・」

鮫嶋が手を叩くと一人の男とスーツを着せたマネキンが出てきた。  
男がハンドガンでスーツを着たマネキンを撃つ。

マネキンのスーツは表面の部分は穴が空いていたが裏地の部分で  
弾が止まっていた。

鮫嶋：「これは最新防弾繊維を使った物です。これを裏地に縫い付  
けておけば弾は貫通しません。とは言っても・・・激痛が走りま  
す・・・」

一夏：「弾が貫通しないことだけでも十分ありがたいですよ。これ

はいつくらいに用意できますか?」

鮫嶋：「明日には完成します。出来次第すぐにアジトの方までお届けします。」

一夏：「助かります。」

鮫嶋：「あと一夏様と蘭様、楯無様は少しお待ちしてもらっても構わないでしょうか?お渡ししたいものがございます。」

数分後…

一夏：「渡したいものって?」

鮫嶋：「こちらでございます。」

鮫嶋が取り出したものは白い和服と鎧を合体させたものが1着、白いスーツが1着、赤いコートが1着だった。

一夏：「!?こいつは俺の勝負服!?けど俺の服はボロボロになって着れなくなったはず!」

楯無：「あたしの服も新しくなってる!?しかも服の仕掛けもすっかりついている!」

蘭：「この赤いコートつてもしかしてネロのコートですか!」

鮫嶋：「フフフツ、一夏様の服は新しく作り直しを、楯無様のスーツは中の仕掛けをマスターに頼んで最新型の仕掛けに取り替えを、蘭様はブルーローズとレッドクイーンを手にいれたそうなのでご用意させて頂きました。勿論防弾仕様です。」

一夏：「鮫嶋さん…ありがとうございます…こいつをまた着れる時が来るとは思ってもいませんでしたよ…」

鮫嶋：「喜んで頂き何よりです。これで私の仕事はおしまいでございます。」

鮫嶋：「次に会うときは死神連合に勝った時ですね。どうかお気を付けて…」

一夏：「ありがとう鮫嶋さん…また来るよ…」

一夏達は宿泊施設を出た。

これで装備は集まり、戦いの日を待つだけとなった…

## 作戦会議とならし作業

Side：ピースメーカーアジト：リビング

装備を集めたあと一夏達はピースメーカーのアジトにいた。

楯無：「これから作戦会議を始めるわ。今回の作戦の参加者は私達と他のメンバーと裏方で30名が参加予定よ。内訳は私達ピースメーカーが6人、工作で作戦エリアに一般市民が入らないようにするメンバーが6人、状況報告のためヘリを使って上空から無線サポート及び援護射撃するメンバーが6人、治療班が6人、体を動かなくした敵を確保するメンバーが6人の予定。」

一夏：「作戦エリアはポークシティと道玄坂、ライブハウス前か：：」  
道玄坂、ライブハウス前はポークシティがあるエリアが直ぐ近くにあるエリアだ。

楯無：「私達ピースメーカーは最初はメンバーを2つに分けて作戦を開始するわ。チーム1は道玄坂から入ってポークシティの入口に、チーム2はライブハウスエリアから道玄坂エリアの近くにあるポークシティエリア入口で合流しましょう。」

弾：「何で全員一緒に行かないんだ？」

楯無：「手にいれた情報によると道玄坂エリアとライブハウスエリアはとも数は少ないけど、死神連合がハンドガンとかナイフ系統の武器だけど、武装して何も関係ない人を襲っているみたいなのよ：：」

楯無：「幸いにも死人は出てないけど放っておくわけにもいかないでしょ？だからそいつらを捕まえるなりしないと：：作戦当日もおそらく死神連合は一般人に危害を加えるわ：：」

とにかくメンバーはチーム1が一夏君、蘭ちゃん、ベルベットちゃんでチーム2が残りの私、弾君、鈴ちゃんで行くわ。チーム2は状況次第だけあれを使ってエリアを移動しながら死神連合を探すわ。もし発見した場合は出来るだけ騒がしくしないようにしながら戦闘をして敵を撃破するわ。」

楯無：「チーム1は道玄坂のエリアにいる死神連合を発見した場合

は、騒がしくならないように撃破もしくは拘束してちょうだい。」

楯無：「ポークシテイのエリア内に入ったら、恐らく激しい攻撃が開始されるわ。そこでチーム2のあれに乗って突撃をするわ。あれの装甲なら銃弾なんて全然効かないから。」

一夏：「確かにあれなら気にせず突っ込めるな... ビルの入口まできたら後部ハッチと運転席上部ハッチから出て、周辺の敵を排除して内部に侵入っていうところか...」

鈴：「問題は内部にいる敵が何人いるかがわからないことね... 各階にぎつしり敵がいたら流石に対応出来ないわよ...」

弾：「最悪俺の相棒達を使うしかないか...」

一夏：「まってまってえ!! あれ使う気か!? あれは最終手段だ!! 死体の山を作る気か!?!」

ベルベット：「ならさつき貰った大量のRPGで...」

蘭：「ビルを破壊する気ですか!?!」

楯無：「ここはローラーダッシュアーマーを使いながら敵を攻撃していくことにしましょう。目標地点は最上階の13階に設定で、道中の5階と10階に武器保管庫があるみたいだから、そこで弾薬と武器を補充しながら行きましょう。」

一夏：「最上階まで上がったらそのあとの作戦は状況に応じて考えるしかないな...」

楯無：「今出来る作戦はこれくらいね... とにかく今はローラーダッシュアーマーに慣れるように今のうちに練習しましょう。これで作戦会議は終わりよ。各自準備をしっかりとってちょうだい。」

こうして作戦会議は終了した。

Side：ピースメーカーアジト：一夏の部屋

一夏は作戦会議が終わったあと自分の部屋にいた。

部屋にはベッドと机、椅子、銃の整備道具が入った箱があり、壁には様々な銃が観賞用の横置きガンラックにかけられていた。



一夏：「この部屋も懐かしいな…」

一夏達がいない間おそらく蘭が掃除をしてくれたのか比較的綺麗な状態で部屋を使うことが出来た。

一夏は机の上に飾っていた写真を手に取って眺めていた。

その写真はピースメーカーを結成した時の写真だった。

その時のメンバーは一夏と鈴、弾の僅か3名の小さなチームだった。

一夏が写真をもとの位置に戻した時だった。

ガチャ!! ガタツ!!

ガンラックに固定していた銃のうちの2つが、固定していたパーツが取れ床に落ちた。

一夏：「!!連れていけってことか……」

一夏は携帯を取り出した。

一夏：「…もしもしマスターですか？実は追加であるものを買いたいんだ…金は勿論払う。物は……と……です。あるだけ欲しいんです……そうですか……すみませんお願いします。それじゃ失礼します。」

次の日…

Side：UG地下1階：ピースメーカーアジト ガレージ

ピースメーカーのアジトにはガレージが2つあり、試射や対戦式の訓練が出来る広い訓練用ガレージと車等を整備したり収納するガレージがある。

ピースメーカーのメンバーは訓練用ガレージでローラーダッシュアーマーの慣らしをしていた。

ローラーダッシュアーマーは頭の部分を除いた全身を覆う装備品





死神連合：「汚物は消毒だあああああ!!」

どこぞの世紀末な話に出てくるモヒカンが大量にいた。しかも1人はご丁寧に火炎放射機で一般人を脅し道を消毒しながらポークシテイエリアに先行して向かっていた。

チーム1：「何で!」ズルツ

この光景を見て思わずつつこける。

一夏：「何で世紀末でもないのにヒヤツハーしてんだよ!!?しかも楯無さんの情報よりもとんでもないもん使ってんじゃねえか!!!(※)小声

蘭：「マ、マクレーン、とにかく早く止めないと…」

一夏：「そうだな、行くぞってあれ?エイダは?」

蘭：「いない!?何処に…って、え!?!」

蘭が見たものは火炎放射機を持ったヒヤツハーに近づくベルベットの姿だった。

そして後ろから火炎放射機を奪って背中を蹴る。

ベルベット：「…あなた言う通りね…汚物は消毒すべきね。」

火炎放射機を背負い発射口をヒヤツハーに向けたあと容赦なくトリガーを引きヒヤツハーを火だるまにする。

死神連合：「ずあああちやややあああああ水!!みずうううう!!!」

さらに近くにいたヒヤツハーにも炎を発射する。

死神連合：「ギャヤヤヤヤヤ!!!」

死神連合：「このあ(ズガアンツ!!)ひでぶつ!!?」

ヒヤツハーがベルベットの攻撃しようとするがその前にファイブセブンで反撃される。

そのあとファイブセブンと火炎放射機で死神連合を容赦なく射殺、もしくは消毒した。

一夏：「うわあ…容赦ねえなあの人…」

蘭：と、とにかく、これでたぶん全員片付けたと思うんで合流地点に行きましょう。ってエイダさん?何でまだ火炎放射機を持つてる

んですか？」

ベルベット：「……………」ピツ!!

ベルベットは無言で火炎放射機を収納装置に入れた。

一夏：「つて気に入ったの!?!」

その数分後、確保担当のメンバーが死体を回収し、治療班が怪我人の手当で、工作班が警察に変装し一般人を安全な場所に誘導後、道を封鎖して一夏達が入ったエリア入口を封鎖し作戦エリアに入れないようにした。

一方その頃…:

Side : チーム2

弾達はライブハウスエリア内に入り死神連合を探しながら道玄坂エリアのポークシティエリア入口前に向かっていった。

弾：「なあクレア、なんかやけに遠くから悲鳴が聞こえたんだが…………… 気のせいか?」

鈴：「気のせいじゃないわよパウエル。私にも聞こえたから。たぶんやったのマクレーン達でしょ?特にマクレーンは関係の無いやつを襲うやつは容赦なくボコボコにするから。」

(※今回はベルベットが敵をボコボコにしました。というか普通に殺した。)

楯無：「とにかく合流ポイントに向かいますよう。敵はここにはいないみたいだからペースをあげて行きましょう。」

弾：「了解だプレストン。というかここにいるはずの死神連合の奴らは道玄坂の方に全員行ってるのか?」

結局ライブハウスエリアで死神連合を発見することはなく、一夏達と合流するのだった。

各チーム合流後、一夏達はあるものを用意していた。

弾が持ってきた収納装置の一つを使って中に入っていた物を目の前に展開する。

出てきたものを見てベルベットが一言。

ベルベット：「……………何処でこんなの手に入れたの……………？」

弾：「ま、細かいことは気にするな。ほら乗った、乗った!!こいつで突撃するぜ!!」

Side：ポークシティ入口付近

死神連合：「ひまだ……………」

死神連合：「言うな!!俺もひまなんだよ!!けど当番なんだから仕方ねえだろ!!」

入口付近には見張りが多数いた。

しかし、中にはやる気が無いのかあくびをしたり携帯を弄ったりしていた。

入口の前には簡易のバリケードが設置されていた。

死神連合：「敵来ねえかな……………それなら容赦なくボコボコにできるのによお……………」

死神連合：「フラグみたいなこというんじゃねえ!!そんなこと言ったら「ぶろろ」あん？」

死神連合：「なんだ?なんか音が……………」

ブロロロロ……………」

死神連合：「近づいて……………」

ブロロロロロロロロ……………」

死神連合：「きたあ!!!!」

音の正体……………それは高速で突っ込んできたストライカー装甲車だった!!

死神連合は間一髪逃げる事が出来たが入口前に設置していたバリケードは……………」

グツシヤヤヤアアアアア!!!!

装甲車の体当たりで破壊された。







刺し突撃する。

死神連合：「!!来るなあああ!!」

死神連合は持っている近接武器…ナイフや刀、バット、鉄パイプを蘭に投げるが蘭はブレストリガーで全部撃ち落とした。

ガシャッ! ガシャッ!

カチッ! シュパ シュパ

死神連合：「弾切れだ!!今だ!!蜂の巣にしろ!!」

蘭：「させない!!」 タンッ!くるり…カシャンッ!!カシャンッ!!

蘭は地面に刺したマガジンを前転してリロードし、直ぐに突撃を再開し、再び敵内部に進入し敵を射殺していく。

数分後には蘭を襲っていた部隊は全滅し蘭の近くには大量の死体が転がっていた……

ここからは視点を变えて一夏の状況を見ていこう

Side：一夏

一夏：「まずは… 月光と白夜だ!!」

一夏は月光と白夜を二丁拳銃で構え死神連合を攻撃する。  
ズガアンッ!!ズガアンッ!!ズガアンッ!!

死神連合：「ぐあっ!」

死神連合：「ぎゃあ!」

死神連合：「ああっ!」

一夏：「いい感じだ!!」「死ねえ!! (ブンッ!!)」 っと危ないな!!こういうときは雪走で!!」

一夏は腰に差していた雪走を抜き敵が密集しているところに突っ込み、雪走で切る。

すういいいいい…

一夏：「ひさしぶりに使ったけど軽いな!!やっぱ良い刀だ!!」

一夏は通りすぎた後雪走を鞘に戻した。それと同時に敵は切られた場所から大量の血が吹き出し次々に倒れていく。

死神連合：「てめええええ!!」

楯無：「そこ!!」シュツ!!

一夏の後ろから攻撃しようとした敵に楯無がダートを投げる。

(※ダート・・・簡単に言うとは投げナイフのように使うことが出来る短剣。ここではイフリート・シュナイドのヒートダートをイメージしたものの使用。ちなみに楯無は持っていないが短剣のような形以外にも小型の槍型や矢型もあり矢型はダーツに使われることが多い。)

グサツ!! バタリツ!!

ダートが死神連合の右胸に刺さりあの世に送る。

楯無：「油断大敵よ一夏君。」

楯無はダートを投げ、敵を一人ずつ確実に仕留めていた。

一夏：「油断なんかしてないですよ。あんたが近くにいるんだ、背中は絶対安全。それよりも!! (ズドオンっ!!) あんたも後ろを気を付けないとな。」

一夏はソードオフショットガン改で楯無の後ろにいた敵を吹き飛ばした。

楯無：「私は大丈夫よ♪私が誰か忘れた?」

一夏：「頼りになる刀奈お姉さん・・・でしょ?この程度の連中にはあれは使わないで行けるってことですか・・・っと、弾達は今・・・うわあ・・・相変わらずごり押しか・・・ってか弾の奴あれ使ってやがる・・・鈴に当てるなよ・・・」

一夏が見たもの・・・それは弾と鈴が手持ちの銃で弾幕を張り、敵を殲滅していた。

というか弾が敵味方関係なく銃で攻撃していた。

少し時間を巻き戻し、ここからポークシテイ内部潜入直後の弾の行動を見ていこう。

Side：弾

弾：「相変わらさずうじゃうじゃいやがるな・・・」

鈴：「数を集めるしか死神連合のアホ共は出来る事が無いんでしょ?数を集めてもちゃんとした技術と精神、力がなかったら早死にするのにな・・・」

弾：「そんじゃそのアホ共に戦い方ってやつを教えてやるとするか





## 暗闇に潜む殺意

Side：渋谷：ポークシテイ1階

一夏達は1階にいる敵を倒したあとローラーダッシュユアーマーを収納装置から取り出し装備していた。

一夏：「ここからこいつで一気に5階まで上がるぞ!!用意はいいか!?!」

弾：「おう!!」

鈴：「良いわ!!」

楯無：「勿論!!」

蘭：「こつちも問題ありません!!」

ベルベット：「……行けるわ……」

ここで一夏達のアーマーの装備を紹介しよう。

一夏

肩部7連装ミサイルランチャー

ヘビーマシガン

両腕部アームパンチ

腰部ガドリング

腰部2連装ミサイルランチャー

蘭

ヘビーマシガン改

アームパンチ

ソリッドシューター

弾

ハンディソリッドシューター

アームパンチ

肩部7連装ミサイルランチャー

腰部ガドリング

鈴

ハンディソリッドシューター



S i d e : 渋谷 : ポークシティ5階

ズガアン!!ズガアン!!

ズガガガガガガンツ!!!!

死神連合 : 「うわあああああ!!!」

一夏 : 「到着!!」

楯無 : 「武器庫まで急ぐわよ!! 奴らが集まってきたら面倒なことになるわ!!」

ベルベット : 「……………? 待って、何? これ……………」

鈴 : 「これは……………ゴミの山?」

ベルベットが見つけた物……………それは信号機やタイヤ、バケツ等が無茶苦茶に積み重ねて出来たゴミ山だった。

蘭 : 「!? 待ってください!! これオブジェですよ!?!」

よく見るとそれは本物ではなく良くできたオブジェだった。

鈴 : 「!! ゴミ山のオブジェ!」

一夏 : 「……………確定だ、やつはこのポークシティの何処かに確実にいる!!」

ベルベット : 「? どういうこと?」

一夏 : 「詳しい話は後だ!! 急げ!!」

一夏達は死神連合を蹴散らし、目的地の一つ、武器庫まで来ていた。ここで少しでも弾を補給して戦闘を有利にするためだ。

一夏 : 「使えるやつは収納装置に入れろ!! 少しでもこっちが有利になるようにしねえと……………!!」

ベルベット : 「……………? 何かしらこれ……………!! これは持っていった方が良さそうね……………」

ベルベットがなにかを見つけたようだ。が他のメンバーはその事に気がついていなかった。

弾 : 「もう少し……………終わった!!」

鈴 : 「やっとね!! 速く上に行くわよ!!」

ピースメーカーのメンバーがローラーダッシュユーマーを収納装置に入れて武器庫を出た時だった。

??? : 「ゼタおせえ!!」

ピースメーカー：「!?」

???：「ゼタおせえんだよ!!このヘクトパスカルが!!ここまで来るのにどれだけ時間かけてやがる!!」

謎の男が武器庫から少し離れた場所に立っていた。

一夏：「お前は...!!相変わらずゴミみたいなオブジェを作りやがって!!ふざけてんのか南師!!」

???↓南師：「この芸術の美しさを知らないとは... お前らはやつぱり屑だ!!」

楯無：「貴方には言われたくないわ...!!関係のない一般人を痛めつけて何が楽しいの...!!」

南師：「センスもないロクデナシ共は生きる価値はねえ。

この世で生きるために一番必要なものは完璧な計算と...美学だ...」

弾：「美学だあ?そんなもんお前に必要ねえ!!お前に必要なものは常識だ!!こんなゴミ山のどこが美しい!」

南師：「常識なんてものはゴミだ!!クラッシュ!!まとめて俺が捨ててやる!!それにこの美しさがわからないやつはこの世で生きる価値は無いな...」

南師は何処からかメガホンを取り出した。

南師：「今ここで消してやる。この芸術の美しさがわからないロクデナシ共に告ぐ!!お前ら全員ここで4ね!!」

次の瞬間南師の後方から小型ミサイルが大量に飛んできた。

一夏：「な?!全員散開!!逃げ!!」

ズガガガガガンツ!!!

弾：「どわああああ!!無茶苦茶だああ!!」

蘭：「人の事を言えないから!!おにいも最早(※)トリガーハッピーにしか見えない位あれ(※M60)撃ちまくってから!!」

(※トリガーハッピー... 本来のトリガーハッピーは射撃にのみ集中しすぎる状態に陥ること言う意味だがこの場合は銃を乱射することに興奮、快感を覚える人物のことを指す言葉。



ちなみに弾は後者であるが最近は少しだけましになった。

次々と飛んでくるミサイルを避けていくピースメーカーのメンバーだったがここでまさかのアクシデントが発生する。

ミシツミシツ………ボカアツ!!!

一夏：「はあ!？」

蘭：「嘘!？」

弾：「んなつ!？」

鈴：「いい!？」

楯無：「ちよ!？」

ベルベツト：「ツ!？」

ピースメーカー：「うわあああああ!!!??」

なんと床が破壊されピースメーカーは下の階に落ちてしまった!!  
小型とはいえミサイルを何発も喰らえば壊れるのは当たり前だが  
まさかのタイミングで発生してしまった。

そしてメンバーは落下した影響で分断されてしまった……

ここで分断されたメンバーの各自の様子をしてみよう……

Side：一夏

一夏：「いててて…無闇矢鱈とミサイル撃ってきやがって…おーい!!  
誰かいねえか!!いたら返事してくれ!!」

???:「こつちです!!一夏さん!!」

一夏：「その声は蘭か!!」

???:「はい!!」

一夏：「無事で良かった…他のメンバーはどうなったんだ?」

蘭：「少し離れた場所にいると思います。ベルベツトさんはまだ  
会ってあまり経ってないからなんとも言えないですけど他の人達は  
そうそう倒れることはないですよ。」

一夏：「だよな…とにかく合流して上に戻ろう。ここ何階だ？暗くてよく見えねえな。辛うじて蘭が見えるが…」

一夏は収納装置からライトを取り出し辺りを照らしながら上に向かう階段を探す。

すると…一夏の顔の近くを何が通った。

一夏：「なんだ？なんか目の前を通ったような…？」

バサバサバサバサバサツツ!!

一夏：「!?蘭!!気をつけろ!!なにかいるぞ!!羽ばたくような音が聞こえる!!」

蘭：「了解です!! !、あそこに高台みたいなのがあります!!一夏さん、あたしが上から周りの様子を見ながら援護します!!」

一夏：「わかった!!（ゴオオオオ!!）うおっ!？」

一夏の背中になにかが当たった。

一夏：「くそ!!こうなったらゴーグルで（ガチャツ）嘘だろ壊れてやがる…」

まさかの暗視ゴーグルが使う前に壊れるという最悪のパターンが発生した。

蘭：「一夏さん!!上に照明装置がありました!!これで明かりをつけれ（バサバサバサバサツツ!!）ああもうなんなのこいつ!？」

辺りをライトで照らして飛んできた物を見る。

その正体は通常よりも大型のコウモリだった。

しかも大量にいた。

蘭：「コウモリ!?何でこんなところに!？」

ダンツ!!ダンツ!!ダンツ!!

蘭はスネークマツチで攻撃するがあまり効いていなかった。

蘭：「効いてない!?まさかこのコウモリって（※）B・O・Wってやつ!？」

（※）B・O・W：バイオ・オーガニック・ウエポンの略。生物兵器でバイオハザードで出てくるハンターやタイラントもこれに含む。なおBOWは基本的に人為的に作られた物を指し、劇中によくでる事故などによるウイルスの影響を受けて偶発的に発生したクリーチャーは

イレギュラーミュータントと呼ばれている。)

一夏：「ゲームじゃねえんだぞ!! 現実でそんなもんが出てくるわけないだろ!!」

蘭：「でしようけど普通なら1発で死にそうな奴が弾喰らってるのにピンピンしてるっておかしいでしょ!!」

ズドオン!! ズドオン!!

蘭は武器をベネリM4スーペルP90に変更して攻撃をする。

しかし…

蘭：「これもダメなの!? ダメージはあるけど倒しきるまでは…!!」

一夏：「こうなったら通常弾じゃなくてA I S弾を使え!! スネークマツチかS A A改、ブルーローズならA I S弾を使える!! それで奴らを仕留める事が出来るはずだ!!」

……しかしどつかで見たことあるようなコウモリだな… どこでだ…?」

蘭：「わかりました!! A I S弾と… あった!! ブルーローズ… 喰らいなさい!!」

ズドドンツ!!

ブルーローズから2発の銃弾が発射された。

ブルーローズはコウモリの体を貫通し後ろにいた別のコウモリ数体を撃ち落とした。

蘭：「さすがにA I S M 5 0 0弾は効きましたか… (バチンツ) うん? って明かりがついた!? 何で!？」

どういうわけか急に明かりが付き、辺りが光に照らされ暗いところが見えるようになった。

そして一夏達は見た。見てしまった…

床に干からびた死体が大量に転がっていた…

一夏：「ツ!!!」

蘭：「イツH!!」

いやああああああああああ

蘭の悲鳴が周辺に響いた。

!!!!!!!!!!!!

一夏「こいつは!?全部コウモリにやられたのか!?「ブオオッ!!」!?  
またか!?って嘘だろ!」

一夏を攻撃していた物…それはとてつもなく巨大化したサイズに  
なったコウモリだった。

一夏が驚いたのはコウモリのサイズに驚いたのではなかった。理  
由は簡単で実は一夏はこのコウモリを知っていた。

しかしこのコウモリは日本どころか他の国にも存在しないもの  
だった。

一夏：「そうだ!!思い出したぞ!!蘭!!気をつけろ!!こいつは特地の  
洞窟に生息するコウモリだ!!」

蘭：「ええ!?特地から来たんですかこいつら!?」

そう、このコウモリは特地の世界のコウモリだった。

一夏：「多分最初の日本侵攻の時に何らかの原因でこっちに入っ  
てきたんだ!!それをあいつらが利用したんだ!!(こいつは獲物から奪っ  
た血を成長のためのエネルギーに変え一気に成長する…!!特地の人  
間よりもこっちの世界の人間の方が体の健康状態は遥かに上で血の  
質も確実に上だ!!つまり成長するためのエネルギーは一人だけでも  
大量にある…!!この大量の人から血を吸ったんだからあんな大き  
さになる!!)」

一夏：(しかもこいつはでかくなると魔力で体を硬くすることが出  
来る…!!蘭を襲ったコウモリが通常サイズだがそれでも十分な防  
御力を持つてる… スネークマツチの通常弾が効かないのはそうい  
うことだったのか!!)

一夏：(こいつの弱点は火だ!!)「マスターから貰ったあれを試して  
見るか!!ハイパーバズーカ展開!!てえええええ!!」

ストカアンツ!!ストカアンツ!!ストカアンツ!!

コウモリ：「ぎいいいい!!?!?!」

バズーカから弾が飛び出しコウモリに直撃する。

爆発の炎がコウモリの体を焼くが威力が足りていないのかピンピ  
ンしていた。

一夏：「ならこいつだ!!質より量でいく!!」



ここで一端一夏sideから別視点に切り替えしよう。  
次の視点は…

Side：弾

いやああああああああああ  
→蘭の悲鳴→  
!!!!!!!!!!!!

弾：「!?はっ!?蘭!?!」

→落ちたときに頭を打って気絶していた。

蘭の悲鳴を聞き思わず飛び起きた弾。

弾：「そうか…あんどきに何階まで落ちたかはわからないが頭打つて気を失ったのか…って速くメンバーと合流しねえと!!」

弾は上に上がれる場所を探し走り出したその時だった。

ズガガガガガアンツ!!!!

弾：「うおっ!?!なんだ!?!」

弾は銃声が聞こえた方へ向かった。

そこで見たものは…

ズガガガガガアンツ!!!!

ベルベツト：「……………!!…っ…」

鈴：「ちょこまかうごくんじやないわよ!!狙いがつけられないでしようが!!」

???：「グルルルルルツ…」

ベルベツトと鈴が謎の生物と戦っていた。

弾：「!?んだよあれ!?速すぎてどんな生き物かわかんねえぞ!!とにかく… 鈴!!ベルベットさん!!伏せろ!!」

かぼんっ…ズドカアアアンツ!!!

鈴：「!?おわっ!?」

ベルベット：「くっ…!」

弾はM79ソードオフで謎の生物を攻撃する。

鈴：「ちよつとおおお??!!味方が近くににいるのに何でグレネードぶっぱなしてんの!?」

弾：「いや伏せろって言っただろ!!」

ベルベット：「…せめてもうちよつとはやく… 言つて…」

弾：「次から気をつけますよ… てかこいつら狼だったのか… 道理で早いわけだ…」 「グルルルルルルッ」 あんっ?また狼「グオオオオツ!!!」 んな!?ぐあっ?!!」

弾は狼とは別の生き物に襲われ吹き飛ばされる。

その拍子で持っていたm79ソードオフと収納装置が弾から離れた場所に飛んでいってしまった。

鈴：「弾!」

弾：「ぐくっ今度はなんだ…!!」

???:「グオオオオオオツ!!!」

暗闇から現れたのは通常の2倍近くの大きさの熊だった!!

鈴：「はあああ!熊!」

ベルベット：「どうしてこんなところに…!?ここは動物園だとでも言うの…!?」

熊：「グオオオオオオツ!!!」

弾：「成る程狙いは俺か… いいぜ、来な!!同じ土俵で相手してやるよ!!(バサッ!!ボキッ!!ボキッ!!)ウオオオオオオラアアアアア!!!」

弾の上の服を脱いで上半身裸になり、熊に向かって走っていく!!  
人VS熊の通常では考えられない戦いが始まった。

この戦いの最初の一撃は弾の攻撃から始まった。

弾：「ウオオオオツ!!」 ヒダリジャブ↓ミギストレート

熊：「ガアッ!グオオオオオオツ!!!」 ウデフリマワシ

弾：「うおっ!?この!!」ヨケテカラノトビゲリ

熊：「ガアツ!?」フラツキ

弾：「フンツ!!デリヤア!!」ヒダリジヤブ↓ライトアツパー

熊：「グオオオオオオツ!!!」ウデタタキツケ!!

弾：「うぐっ!?」

ドカアンツ!!ドカアンツ!!ドカアンツ!! 連続タタキツケ!!

弾：「グオオツ!?こんの…!!調子にいい!!のるなあああ!!!猛虎!!脳  
砕きの極みいいいい!!!」

クマモチアゲテダイジャンプカラノ頭カラ地面タタキツケ!!

熊：「ウギヤアアオアア!?」

頭から地面に叩きつけられた熊は最後に断末魔の悲鳴あげるとピ  
クリとも動かなくなつた。

弾：「…：…終わつたか…うぐっ!?糞!!思つたよりダメージがデケエ  
…」

弾の体は叩きつけられた時につけられた傷が至るところにあつた。  
しかし、体が頑丈なお陰か動けないほどの怪我ではなかつた。

鈴：「むしろ何でその程度で済んでるのかわからないわよ…：…相変  
わらず馬鹿みたいな頑丈さね…」

弾：「うるせえーよ…：…とにかくこいつは持って帰って後で解体して  
肉にして食うか…」

ベルベット：「…：…食べるの!?!」

こうして弾達は戦闘を終え他のメンバーと合流するため行動を開  
始する。

ここでまた視点を変更しよう。

最後のメンバーの楯無はその頃…

S i d e : 楯無

楯無：「ああもう!!何考えんてんのあのバカは!!」

楯無はたまたま見つけた個室で服を着替えていた。

実は落下時に鉄骨などにスーツを引っ掛けてしまいスーツがボロ  
ボロに成ってしまったのである。



ボロボロになったスーツを脱ぎ勝負服の白いスーツに着替え、装備を装着し直して他のメンバーと合流するため行動を開始する。

歩き始めて15分

楯無は上に上がる階段を発見する。

しかし…

楯無：「はあ…結局こうなるのね…」

階段付近まで近付いた楯無を囲むように敵が集まってきた。

少し離れた場所にも大量の敵がいた。

死神連合：「ケケケツこれで終わりだなあお嬢ちゃん……」

死神連合：「その邪魔な服を引き裂いて俺の息子を突っ込んでやる

…ヒヤヒヤヒヤ!!」

楯無：「黙りなさい…糞豚…」

死神連合：「ああ!」

楯無：「あなた達はここで死ぬ。私の大切な人と友を傷つける人は私が始末する。たとえそれが楯無として、いえ、人としてふさわしくない生き方だったとしても!!」

楯無は両腕を上へ上げ勢いよく振り下ろす。

シュツ!!ジャキンツ!!ジャキンツ!!

スーツの袖の中からハンドガンが飛び出し、握ったのとほぼ同時にセーフティーが解除され、囲んでいる敵に向けて発砲する。

ズガガガガガガアンツ!!!

死神連合：「どわああああああ!!!?」

楯無：「まだまだっ!!」

ズガアンツズガアンツズガアンツズガアンツズガアンツ!!!!

楯無：「右!!後ろ!!前!!右!!左!!左!!左!!左!!」

ズガアンツズガアンツズガアンツズガアンツズガアンツ!!!!

死神連合：「うわあああああ!!!」

死神連合が銃を構える前に素早く銃で仕留める。

ただ撃つだけではなく高速で回転し、まるで舞うように敵を倒していく。

銃声と同時に暗い部屋に断末魔の叫びが響く。

楯無を囲んでいた死神連合が次々に倒れていく。

囲んでいた人数は20人ほどだったがわずか30秒で倒した。

離れた場所にいた敵は攻撃範囲にいなかったため無傷だがいきなり仲間が大量に倒れたため動揺する。

死神連合：「なんだよあれ!?あれハンドガンだよな!?なんだあの連射速度は!?!」

死神連合：「!!青い髪に、白いスーツ、それにあの舞うように銃を撃つ女!?まずい!!速く逃げるぞ!!こいつは…!!」

タタタツ!!ザシユ!!ザシユ!!

最後まで言葉が発せられる前に楯無が高速で接近しナイフで敵を切り刻む。

死神連合：「あく、むを…みせ…る…お、ん…な」

バタリッ

楯無：「悪夢ね… たとえ悪夢だろうと見せる時間なんてあげないわ…」

楯無：「ベレッタM92Fをベースに連射速度を極限まで高め、装弾数を増やし、殲滅能力を大幅に強化したこのクラリック・ガンと私の戦闘技術があれば倒せない敵はいない…」

死神連合：「クラリック・ガン!?てことはさっきの銃の撃ち方ってガン・カタ!?!(※)リアルであるのかよ!?!」

(※クラリック・ガンとガン・カタは映画リベリオンで登場するものでクラリック・ガンは主人公が所属する組織の銃でガン・カタは作中の設定だと基礎の動きを習得しただけでも攻撃力は120%一撃必殺率も63%上昇するといわれている。

因みに余談だがガン・カタはリベリオン作中でわずか10分程しか登場シーンがないがリベリオンと言えばガン・カタといわれるほど印象に残るシーンと言われており、今では2丁拳銃で戦うキャラの動きはこの影響を受けた物が多いと言われている。(

死神連合：「く、くそ!!こうなったら… ランチャー班前へ!!撃ちまくれ!!」

ボシユツ!!ボシユツ!!ボシユツ!!ボシユツ!!



クラリツク・ガン

ベレッタM92Fをベースに改造した楯無用の銃

ベレッタM92Fをマシンピストル仕様に改造して連射速度を大幅に上昇させ、殲滅能力を高めた。

マガジンは通常仕様の物とクラリツク・ガンを持ったままリロードが出来るようにした地面にたると起き上がる球体付きマガジンがあり、両方とも弾は最高20発まで入れられる。

楯無の勝負服である白いスーツの仕掛けと組み合わせるとスリーブガンとして使用可能で今回はまだ使っていないが袖の中から予備のマガジンを仕掛けで動かし、マガジンを抜いた状態のクラリツク・ガンのマガジン挿入口を袖の中に向けてリロードする事が出来る。

近接戦用のギミックはオミットした。

製作者は一夏。

※説明が難しいので、分かりにくいかもしれませんがYouTubeに映画リベリオンの戦闘シーンがいくつか投稿されていました。もしよければそちらの方を見ていただくとどんなものかわかると思います。